

研究紀要

第5号

1989

財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

研 究 紀 要

第 5 号

1989

財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目 次

- 井草式土器及び周辺の土器群について 宮崎朝雄・金子直行…… 1
- 東国における後・終末期古墳の基礎的研究(1) 田中広明・大谷 徹…… 71
- 終末期古墳出現への動態 I 田中広明……139
——変容する在地首長層と造墓の展開——
- 古代集落遺跡の再検討 井上尚明……179
——郡衙・郷家・一般集落——

井草式土器及び周辺の土器群について

宮崎朝雄・金子直行

Iはじめに

II研究史

III井草式土器の検討

IV周辺の土器群の検討

V井草式直前段階の土器群の検討

VI井草式土器及び周辺の土器群の成立について

VII収束

Iはじめに

井草式土器は、I式、II式に細分され、撲糸文系土器群の最古段階に位置づけられている。撲糸文系土器群は、関東地方において最初に地域的な纏まりを持って展開した土器群であり、それを指標とする撲糸文化は、堅穴住居、貝塚、土偶など縄文文化を代表する文化要素の出現期として縄文時代の中で、特に高く評価されている。ところが、撲糸文系土器群と併行する他地域の土器群の存在については現在不明であり、撲糸文系土器群及び撲糸文化は孤高の存在となっている。近年になって、撲糸文系土器群後半の稻荷台式土器、稻荷原式土器に押型文土器が関係する事がようやく確認されてきた。千葉県東寺山遺跡では、縦走する撲糸文と山形押型文の併施土器が出土し(鈴木1977)、東京都二宮森腰遺跡では、山形押型文を取り込んだ稻荷原式土器が確認され(土井1974)、統いて東京都多摩ニュータウンNo205遺跡では山形押型文を取り込んだ稻荷台式土器が検出された(原川1982)。しかし、中部地方における押型文土器の編年が確定していない為に、撲糸文系土器群と押型文土器の併行関係が明瞭でなく、どこまで遡かが争点になっている。また、従来井草式以前と一括されてきた表裏縄文土器群を細分して、撲糸文系土器群の後半まで位置づけようとする考え方や(宮下1986・金子1986)、室谷洞窟上層土器群の一部を井草式併行として再評価する考え方も示されてきているが(土井1986)、それらの内容提示は充分なものではなく、未だに撲糸文系土器群に併行する他地域の土器群は不明と言わざるをえない。さらには、撲糸文系土器群の縄文土器編年におけるこのような不安定な状況は、草創期、早期の時期区分の違いにまで及び混乱に拍車をかけている。(註1)

本稿では、最近、資料の増加が著しい井草式土器を整理することにより、関東地方における撲糸文系土器群出現期の様相を検討し、そこに他地域の土器群との関連を探り、統いて、井草式土器と併行すると考えられる室谷洞窟上層土器群、表裏縄文系土器群(註2)などの周辺の土器群を検討する事によって、関東地方における撲糸文系土器群成立期の状況、及びそれと関連した中部地方を中心とする周辺地域の状況を明らかにしようとするものである。そして、中部、関東地方に分布する室谷下層式段階の土器群から個性の強い地域的な土器として井草式土器が成立する変革が、一人撲糸文系土器群だけの事ではなく、少なくとも中部、関東地方における土器群の変革として総体的変

遷の中に位置づけられる事を明らかにしたい。

II 研究史

1 井草式土器の編年と細分

井草式土器は、矢島清作氏により1942年に「口縁部の肥厚外反と、縄文を口縁上端に付するのを特徴とする土器」として提唱され（矢島1942）、1940年に撫糸文系土器群として最初に発見された稻荷台式土器（白崎1941）とともに最古の縄文土器に位置づけられた。当初は稻荷台式が古く、井草式が新しいと考えられたが、1951・1952年の大丸遺跡の発掘調査において稻荷台式土器が上層に、夏島式土器が中層に、井草式土器・大丸式土器が最下層に検出され、井草式・大丸式→夏島式→稻荷台式と続く編年が確認された（芹沢1954、杉原・芹沢1957）。続いて1954年に行われた西之城貝塚の発掘調査では、最下層の褐色土層から口唇部の肥厚外反した井草式土器、その上の下部貝層から口唇部の肥厚・外反が顯著でない井草式土器と大丸式土器が検出され、この層位を基に芹沢長介氏によって井草式土器はⅠ式、Ⅱ式に細分された（芹沢・西村1955）。ここにおいて、井草式土器は撫糸文系土器群最古である事が確定した。1959年、岡本勇氏は馬の背山遺跡の報文の中で、馬の背山遺跡出土の口唇及び口縁内面に撫糸文施文が見られ、口縁の肥厚外反が著しい土器を、平根山遺跡出土の井草Ⅰ式、Ⅱ式土器より古く考え、「三浦半島に分布する井草式土器には三つの型式的な傾向がある。」と井草式を3分した（岡本1959）。芹沢・岡本両氏の細分基準は、主に口唇部の肥厚外反の度合いにあったと言える。また、岡本氏が示した口唇部内面施文が古いとする觀方は、原信之氏の大船山居遺跡の分析に引き継がれていった。

1950年代までは、井草式土器は最古の縄文土器であったが、1950年代後半から1960年代前半にかけて隆起線文土器、爪形文土器、押圧縄文土器等の草創期土器群が相次いで発見され、1960～1962年に行われた室谷洞窟の発掘調査では、上層から井草式土器及び撫糸文系土器群類似土器が出土し、その下層から押圧・回転縄文土器である室谷下層土器群が検出され、井草式土器は縄文土器最古の地位を降りた（中村1964）。室谷洞窟の成果は、井草式土器にとって編年の位置を決定づけただけでなく、室谷下層土器群の存在によって撫糸文系土器群の出自を探る契機を与え、更に上層土器群の存在によって撫糸文系土器群に併行する周辺の土器群の状況も提示したといえる。調査に参加した小林達雄氏は、室谷上層3～5層に包含される無文、縄文、撫糸文のⅡ群土器に対して、井草Ⅱ式土器および大丸、夏島、稻荷台式土器と極似する撫糸文系土器の「ながれ」を汲む土器と、より薄手で縄文や撫糸文の様子が異なり、稀に口縁部に沿って撫糸文の側面圧痕文を線上に施文する土器に分類し、「これらの複雑な内容は、所謂関東風の土器と土着の土器との混在と解釈」した。また、下層土器群と上層土器群との間に、器形や文様に大きなギャップを認めながらも、「両群土器が縄文以外の文様を殆ど用いず、専ら縄文に終始するという共通性」や補修孔の存在から両者の連続性も指摘した（小林1962）。室谷上層土器群は、室谷下層土器群の系統上にある土着の土器が主体を占め、そこに撫糸文系土器群が混在し影響を及ぼした正に撫糸文系土器群周辺地域の様相と捉える事ができる。中村、小林氏によって、室谷上層土器群は正当に評価されたが、その後は室谷下層土器群と井草式土器成立の関係に視点が集中した為、取り上げられることが少なく、井草式土器は一人歩き

を始めてしまったとおもわれる。

2 井草式土器の成立と表裏縄文土器

草創期土器群の存在が明らかになり、井草式土器の編年が確定した事によって、次は井草式土器の成立に研究の焦点が集中した。1961年、栗原文藏、小林達雄両氏により、関東地方における室谷下層土器群に近い資料として西谷遺跡出土土器が紹介され、室谷下層土器群と井草式土器の地域的な距離がいっそう近いものとなった（栗原・小林1961）。1965年、西村正衛氏は西之城遺跡第二次発掘概報において、井草式土器の中で撲糸压痕文と縄文の複合の土器を第一類、頸部に斜め、水平、羽状縄文の土器を第二類、口縁に斜縄文、胴部に縦位縄文の土器を第三類土器と分類し、本ノ木遺跡の押圧縄文土器、室谷下層土器群の羽状態の縄文手法が「関東においても何らかの関係をもち、その伝統がすべてではなくとも西之城の第一群・第一類および第二類の文様表出に反映しているのではないであろうか。」と考えた。従来の井草式土器の細分が、口唇部の肥厚外反を中心としていたのに対して、文様帯に着目しそこに前段階の押圧縄文土器、室谷下層土器群との関係をはじめて指摘したものといえよう。翌年、西之城遺跡の調査に参加した原信之氏は、西村氏の考えを発展させ『撲糸文化の展開に関する試論』と題する論考を発表した（原1966）。この中で、原氏は西之城遺跡一群一類、二類土器と馬の背山遺跡一群土器に共通する撲糸压痕文や、異種の原体を併用するという井草式土器の中でも古い施文法が室谷下層土器群、西谷遺跡第二類、四類土器に求められる事から、「井草式土器が押圧縄文系土器群を母体として生成されたものであることを示している」と理解し、さらに、山間地域の押圧縄文系土器群、海岸地域の井草式土器という分布から、「井草式土器が生成される背景には人間集団の山間地域から海岸地域への新たな進出、展開といった事情」を考え撲糸文化成立の歴史的意義をも論じた。

1967年、撲糸文系土器群の総括的研究報告となった『多摩ニュータウン調査報告Ⅱ』が刊行された（小林他1967）。この中で、小林達雄氏はNo52遺跡出土の撲糸文系土器群を詳細に分析し、撲糸文系土器群を文様から縄文（J）型、撲糸文（Y）型、縄文・撲糸文（J Y）型、無文（M）型の型態に分類し、胴部（I）文様帯、口縁部（II）文様帯、口唇部（III）文様帯の在り方から第一～五様式の変遷として捉え直した。最初は口唇部の肥厚外反、次に口唇部、口縁部の文様も加わり細分されてきた井草式土器は、小林氏により井草Ⅰ式（第一様式）はI・II・III文様帯、井草Ⅱ式（第二様式）はI・III文様帯を持つ土器として明確に示された。また、第一様式における押圧縄文、二種の原体による羽状縄文を持つJ型a類土器及び平底土器の存在から室谷第一群（下層）土器との繋がりが指摘された。そして、「両様式間に隔然たる断絶を認め」ながらも「室谷第一群土器のモデルチェンジの結果として、撲糸文系土器の発生へと連続する」という解釈が導かれた（小林1968）。西村、原、小林氏によって井草式土器の成立が室谷下層土器群の系統に関係する事が強調されたが、室谷下層土器群、井草式土器ともまだ資料が少なく、その間の隔たりを埋める作業は今後の課題として残された。1967年には大船山居遺跡の発掘調査報告において器面内面に縄文または撲糸文を施文した土器が報告された（原1967）。この1群1類、2類土器に対して原氏は、内面施文の土器がある西谷遺跡4類土器との繋がりから「口唇部の肥厚外反が顕著になる直前」のもので「井草式土器

により先行する縦年の位置」を考えた。大船山居遺跡の報告は、井草式土器と表裏縄文土器の関係を初めて指摘したものとして評価できるが、翌年、多摩ニュータウンNo188遺跡出土の類似資料をもって「時間的なものと考えるよりは、むしろ地域的なものと考えた方が妥当」と可見通宏氏が把握した如く（可見他1968）、大船山居遺跡や多摩ニュータウンNo188遺跡の表裏縄文土器は、井草式土器と表裏縄文土器の並行関係を示した地域性と考えられるのである。

1969年、山内清男氏により『縄紋草創期の諸問題』が発表された。この中で、山内氏は1965年に行われた大谷寺洞窟の層位的成果について「（一）井草式の層がある。（二）その下に内外面に粗い単方向縄紋を有し、柾ノ湖上層に似た土器が出る。底は限丸方形平底で室谷下層に近い。（三）その下に粗製の土器型式がある。これは一見無紋のごとくであるが、きわめて浅い縄の回転圧痕が見られ、決して無紋なのではない。（中略）（四）の最下層は細隆線文である。」と記し、「大谷寺1・隆線文→大谷寺2・浅縄文→大谷寺3・斜縄紋→井草・大丸」と続く縦年案を呈示した（山内1969）。1976年、大谷寺洞窟の斜縄文土器は内面施文の無い大谷寺Ⅲa式、内面施文のある大谷寺Ⅲb式として報告された（塙1976）。大谷寺Ⅲ式の登場によって、柾ノ湖Ⅱ式（原1958）に代表される中部地方の表裏縄文土器が、井草式前段階の土器として一躍注目される事になった。1974年、鈴木道之助氏は、1970年頃から始まった大規模発掘調査によって検出された、下総台地における草創期土器群を整理し、統いて井草I式の広義のJ型a類土器を挙出し、撫糸文系土器の祖源について表裏縄文土器の関係を中心検討した（鈴木1974）。鈴木氏は、大船山居遺跡第一群一類土器は「柾ノ湖Ⅱ式に直接影響され、J型a類土器など古型の井草I式に接続するもの」、撫糸文の二類土器は「第一様式Y型、すなわち大丸I式土器に関連するもの」、西谷遺跡第四類土器、大谷寺Ⅲ式土器は「柾ノ湖Ⅱ式土器、室谷第一群土器の折衷様式の土器」と位置づけ、井草式前段階における柾ノ湖Ⅱ式の影響を強調した。そして、「撫糸文系土器は柾ノ湖Ⅱ式の表裏縄文の器形、施文方法の大部分を継承し室谷第一群土器の施文方法にも影響を受けて発生した土器群」と考えた。鈴木氏の論は、柾ノ湖Ⅱ式を機軸にして中部、関東地方を視野に入れて撫糸文系土器の祖源を論じたダイナミックなものであるが、その基本は柾ノ湖Ⅱ式土器が大谷寺Ⅲ式土器を介して室谷第一群土器に併行することにある。果たしてそうであろうか。大谷寺Ⅲ式土器は、室谷第一群土器の新しい段階に位置づけられるが、柾ノ湖Ⅱ式土器は大谷寺Ⅲ式土器に影響を与えたのではなく、大谷寺Ⅲ式土器等の室谷下層式段階の表裏施文を持つ土器群を祖源として、中部地方において展開した井草式併行の土器群と考えたいのである。そして、増野川子石遺跡、柄原洞窟遺跡なども、井草式以降展開した表裏縄文系土器群であり、井草式土器と若干の関係を持ったと捉えられる。それは、鈴木氏が「柾ノ湖Ⅱ式土器の影響を受けた」土器として挙出した雨古瀬遺跡、高根北遺跡の「下総台地の表裏縄文土器」（鈴木1979）が多量の井草式土器と一緒に出土している事からも理解出来るのではないだろうか。しかしながら、柾ノ湖Ⅱ式を中心とする中部地方の表裏縄文系土器群を井草式以前に位置づけそこに井草式の祖源を求める鈴木氏の考えは、室谷下層式の実体が明瞭ではない当時にあっては、かなりの説得力を持って受け入れられたと思われる。

一方、関東地方では井草式土器の成立に絡んで注目されていた表裏縄文土器であったが、中部地方でも増野川子石遺跡（酒井1973）、柄原洞窟遺跡（小松1978）等纏まつた資料が報告され、表裏縄

文土器の分布の中心が中部地方にある事が指摘され(宮下1978)、編年的位置が問題になってきた。1981年広瀬和雄氏は、小佐原遺跡出土の表裏縄文土器を分析する中で、表裏縄文土器を回転縄文系土器群の系統に位置づけて考え、「器形・文様・口縁部文様帯の有無・縄文原体の差異等より」回転縄文系土器群を、口縁部文様帯を持ち平底の室谷洞窟・鳥浜貝塚一表裏縄文土器が主体で平底の大谷寺洞窟一丸底あるいは尖底の表裏縄文が主体の梳の湖遺跡・川子石遺跡の三時期に区分した。そして小佐原遺跡の表裏縄文土器は、平底を持つ第二類b種を一段階古く分離し、他の大部分は「丸底あるいは尖底の深鉢であること、側面圧痕文の併用、「正反の合」による異条斜縄文といった文様が存在せず単純な单節縄文のみであること」から後出的な様相と捉えた(広瀬1981)。広瀬氏は、梳の湖遺跡・増野川子石遺跡・小佐原遺跡等中部地方の大部分の表裏縄文土器を、大谷寺洞窟の系統にある後出の土器と正確に把握したが、撫糸文系土器群との関係については、一般的に撫糸文系土器の母体と考えられていた表裏縄文土器をなおも古く位置づけている。続いて1982年には、宮下健司、堀内真氏が池ノ元遺跡・仲大地遺跡・若宮遺跡等の富士山麓における表裏縄文土器を検討し、この地域の特徴である表裏縄文土器と表裏撫糸文土器の存在を、梳ノ湖II式土器と大船山居遺跡に関連づけて捉え、井草式以前に位置づけた。そして、池ノ元遺跡の表裏撫糸文の土器を「表裏縄文土器から表裏撫糸文土器への過渡的な様相を呈す折衷様式の土器」と考え、表裏縄文土器→表裏撫糸文土器→井草式土器の登場という展開を描いた(宮下・堀内1982)。この考えは、梳ノ湖II式土器及び大船山居遺跡の土器が井草式以前である事が前提となっている。既に指摘したように、梳ノ湖II式を含む表裏縄文土器群及び大船山居遺跡の表裏縄文、表裏撫糸文土器は井草式併行に位置づけられ、宮下、堀内氏が提示した富士山麓における表裏縄文土器の様相は、併存する中部地方の表裏縄文土器と関東地方の撫糸文系土器群の折衷的様相と考えられるのである。広瀬氏及び宮下、堀内氏の検討によって中部地方における表裏縄文土器の様相が明らかになったが、撫糸文系土器群との関係については、表裏縄文土器から撫糸文系土器群へという関東地方における図式をそのまま受け入れてしまったと思われる。その結果、中部地方においても、表裏縄文土器は全て井草式以前とする考えが定着した。

3 井草式土器・表裏縄文土器の再検討

1980年頃から、資料の増加に伴い井草式土器及び周辺の土器群について、若干ではあるが見直しが行われるようになってきた。篠原正氏は、資料の増加が著しい北総台地の井草式土器を原体圧痕、口縁部文様帯、口縁部無文帯の在り方などから井草1式、2式、3式に3分し、さらにそれぞれを1a、1b、1c、2a、2b、3a、3b式に細分した(篠原1979・1980)。多聞寺前遺跡を分析した井口直司氏は、口縁部文様帯に撫紐、指頭、縒条体などの押捺圧痕文だけを持つB類土器を、井草I式土器の中でも口縁部文様帯が省略化した土器と捉え、井草I式を細分した(井口1982)。篠原、井口氏らによる井草式土器の細分は、各地域における井草式土器に変化の違いがある事を明らかにした。井草式土器の成立を考える上で、本来最も重要な関東地方における井草式前段階の土器群の様相は、極めて資料が少ないと明確ではなかったが、若干ではあるが資料が増えてきた。布佐余間戸遺跡では、室谷下層式に類似する土器が南関東地方において初めて纏まって出土した(高野1981)。

これらの土器に対して、高野博光氏は結節縄文など地域的な特徴を持つ事から、室谷下層式に併行するこの地域の型式として、「布佐余間戸式」を設定した。その他に、表裏施文、押圧縄文を持つ井草式以前の土器として、山倉大山遺跡（篠原1983）、上草柳第三地点東遺跡（村澤1984）、宮林遺跡（宮井1985）等の資料が追加された。このような状況を踏まえて、1986年、土井孝氏は上草柳第三地点東遺跡出土土器の分析を出発点として、関東地方の資料を中心にして室谷下層式前後から井草式成立までの状況を検討した（土井1986）。「関東地方の資料のみでその変遷をたどることはできないか」という土井氏の意図は、安易に他地域の土器を使用せず地域性を重視した編年観として評価される。井草式土器との関連では、室谷上層土器群を再評価し、また大船山居遺跡を井草Ⅰ式に正確に位置づけた。しかし、井草式以前では、関東地方の段階設定に併せて無理に大谷寺Ⅲa式、Ⅲb式を分離している。表裏縄文土器については、井草式土器の成立にあたり梳ノ湖Ⅱ式土器を重視する鈴木氏の考えに疑問を提示し、さらに表裏縄文土器の一部が井草式以降に存在する事を触れているが、それらの編年的位置づけは明確にしていない。土井氏による詳細な分析は、井草式土器の成立を改めて検討する必要がある事を促した。

1986年12月に埼玉考古学会が実施したシンポジウム「縄文草創期—爪形文土器と多縄文土器をめぐる諸問題」において、金子は多縄文土器から井草式土器の変遷を辿る中で、増野川子石遺跡、柄原遺跡の表裏縄文土器を井草Ⅰ式併行に置いた編年案を発表した（金子1986）。続いて同シンポジウムにおいて、宮下健司氏は柄原洞窟遺跡の層位的出土状況を整理した成果を示しながら、表裏縄文土器について、（1）室谷下層、鳥浜、西谷、永久保遺跡の「平底又は腰丸方形を持つ、非常に器壁の薄い表裏縄文土器」、（2）梳ノ湖遺跡の「丸底をした表裏縄文土器」、（3）柄原洞窟、増野川子石、水上遺跡の「丸底から尖底に移る表裏縄文土器」、（4）小佐原、横山遺跡の「縄文の条が整い、口唇部の形態が外反して統一がとれた表裏縄文土器」、（5）橋沢、立野、稻荷沢、二本木遺跡の「押型文土器に伴う表裏縄文土器」と表裏縄文土器から押型文土器までの大筋としての変遷案を示した（宮下1986）。井草式土器との関係については、柄原洞窟遺跡最下層の羽状縄文の土器と井草Ⅰ式土器の類似を指摘しながらも、特定は保留しているが、表裏縄文土器の系統が燃糸文系土器群に併行する事を示唆したと言えよう。金子、宮下氏の発表に対して、戸田哲也氏は柄原洞窟遺跡の層位的成果を始めとして表裏縄文土器と押型文土器の共伴が疑問である事、関東地方の井草式以降に表裏縄文土器が伴出しない事、表裏縄文土器に間連する大船山居遺跡が井草式以前に位置づけられる事などから、表裏縄文土器を安易に井草式以降に併行させる事はできないとコメントした（戸田1988）。戸田氏の考えは「表裏縄文土器論」として詳しく発表された（戸田1988）。この中で戸田氏は、表裏縄文土器を地域ごとに分類、編年し、各地域編年を対比させることによって全体的な表裏縄文土器の変遷を描いた。分類の基本は、梳ノ湖遺跡の直口口縁の梳ノ湖Ⅱ式と、増野川子石遺跡における、「くの字状屈曲口縁を特徴とする」A類、「薄手・外反口縁を特徴」とし「裏面全面施文」のB類、「薄手・外反口縁を特徴」とし施文が「口縁裏に集中しかつ薄手」のB'類の4種類にある。編年の基本には、直口口縁の類似から鳥浜遺跡=梳ノ湖Ⅱ式、向山遺跡での伴出關係から梳ノ湖Ⅱ式=増野川子石A類・B類、小佐原、三枚原遺跡の分類からB類→B'類の変化を想定した。そして、井草式土器との関係については、石畠遺跡における1類（増野川子石B類）→

2類（室谷上層・井草）の層位から表裏縄文土器は全て井草式以前に位置づけた。戸田氏の論考は、表裏縄文土器に地域性を認め型式学的に分析を加えたものとして評価できるが、その編年は認められない。鳥浜遺跡と桃ノ湖遺跡を同時期に出来ないし、向山遺跡の直口口縁の土器には擬口縁が含まれており、向山遺跡の伴出関係から鳥浜＝桃ノ湖Ⅱ式＝増野川子石A類・B類とする編年には無理がある。また、石畳岩陰遺跡では戸田氏のいう1類→2類の層位は確認されず、ほぼ同レベルの13・27・28層から増野川子石A類・B類類似土器と室谷上層類似土器の出土が報告されており（巾1988）、表裏縄文土器と室谷上層（井草式）土器との関係をかえって良く示しているのではないかであろうか。いずれにしても、土井論文、埼玉シンポジウム、戸田論文と続く研究によって、井草式土器と表裏縄文系土器を中心とする周辺土器群の解明が、戸田氏の言うように現在、改めて「大きな研究課題」として浮かび上がってきたといえよう。しかし、各々に見られるように見解にはなお大きな隔たりがあり、混沌とした状況にあるといえよう。

III 井草式土器の検討

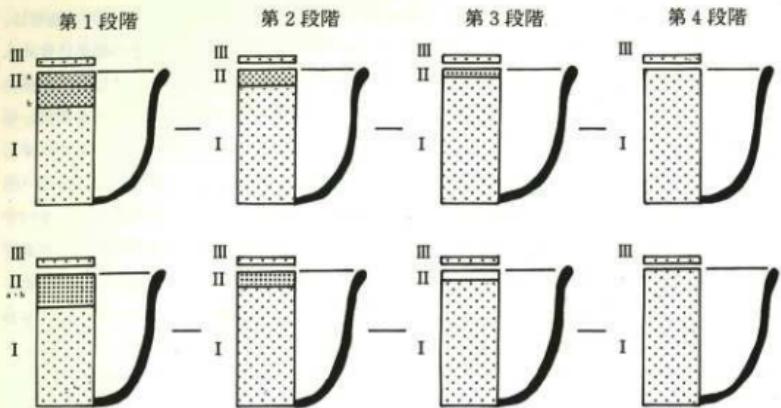
関東地方における井草式土器は、口縁部文様帯の有無から、口唇部、口縁部、胴部文様帯を持つ井草Ⅰ式、口唇部、胴部文様帯を持つ井草Ⅱ式には明確に細分されている。このような文様帯の在り方に関東地方という地域性を強く持つ土器として齊一性が捉えられるのに対して、文様帯の要素となる文様の選択は、縄文と撚糸文に象徴されるように押圧縄文、爪形文、刺突文、指頭押圧文などを含めてバラエティーに富む地域色が認められる。また、近年の資料の増加によって從来の井草式の範疇に入らない土器も検出されてきており、地域色をいっそう強めている状況が確認される。ここでは、井草式土器を4段階に細分して各地域の土器群の詳細な動きを辿ることによって、地域の特徴を整理するとともに、周辺地域の土器群との関係を探ってみたい。なお、文様帯及び型態分類については、口唇部、口縁部、胴部文様帯を各々Ⅲ・Ⅱ・Ⅰ文様帯とし、土器の型態分類は縄文（J）型、撚糸文（Y）型、縄文・撚糸文（J Y）型とする小林達雄氏の分析に従うものである。

1 井草式土器の4段階

井草式土器の細分を決定づけている口縁部（II）文様帯の在り方から、1～4段階の細分を設定した。（第1図）

第1段階 口縁部文様帯の幅が広く、押圧縄文と縄文、縄文と撚糸文、L RとR Lの羽状縄文のように2種以上の文様により丁寧に文様帯を作る。文様帯の幅は4cm前後が多く、構成はⅡ a + Ⅱ bの2段のものと、Ⅱ a + bの重複のものがある。口唇部にも口縁部同様、2種以上の文様により丁寧に文様帯が作られ、文様帯幅を確保するために肥厚外反は最も顕著である。

第2段階 口縁部文様帯の幅がやや狭くなり、横走縄文、斜走縄文、横走撚糸文、押圧縄文のように1種の文様により1段の文様帯を作るだけになる。第1段階のⅡ a部分に指頭押圧文や横ナデによる無文帯を作り、2段構成の意識を残したものもあるが、文様帯の幅は2～3cmと狭い土器が多い。第1段階に比較して口縁部文様帯に手抜きの方向性は認められるが、口縁部文様帯が最も安定した典型的な井草Ⅰ式土器が確立する段階である。口唇部文様帯にも手抜きの方向性が見られ、



第1図 井草式土器文様帯変遷模式図

肥厚外反は弱まる傾向が認められる。

第3段階 口縁部文様帯の幅がいっそう狭くなり、指頭押圧文や横ナデによる無文帯、爪形文、押圧縄文など第2段階のⅡa部分の省略化した文様だけが残り文様帯を構成する。文様帯の幅は1~2cmと狭い。口唇部の肥厚外反はさらに弱まる傾向が認められる。

第4段階 口縁部文様帯が消失する。第3段階の無文帯が不明瞭になり無文部として残る土器もあるが、口唇部文様帯の下に胴部文様帯が続く構成となる。口唇部の肥厚外反は第3段階と余り差がない。

第1段階における2種の文様による構成は、原信之、小林達雄氏が井草式前段階の文様を反映した井草式土器の最古相と指摘したものである。新東京国際空港No.7遺跡(西川1984)では、B地点から第1、第2段階の土器が出土しているが、B地点1号住居址及びA地点からは第2段階の土器が特に纏まって出土している。また、多摩ニュータウンでは、No.52遺跡は第1段階の土器が纏まって出土しているのに対して、No.406遺跡(中西1986)は第2段階の土器だけが出土している。このような同一地域における遺跡の出土状況の違いからも第1段階、第2段階の細分は肯定されよう。第3段階の存在は、篠原正氏が笠木山遺跡で無文帯を、井口直司氏が多聞寺前遺跡で押圧縄文だけの文様帯を注目して細分している。第1段階~第3段階は、口縁部文様帯の省略化の方向性を基本にした井草Ⅰ式土器の細分であり、第4段階はその結果口縁部文様帯を消失した井草Ⅱ式土器である。

2 各地域の様相

撫糸文系土器群の地域性については、全体的には撫糸文(Y型)が優勢な西部、縄文(J型)が優勢な東部という関東地方東西の地域性が認められる。また、多摩ニュータウン地域における縄文・

撫糸文（J Y型）土器の存在や、終末期の下総台地における小地域色のように（宮崎1981、原田1988）、ある時期にはさらに小さな地域性を指摘する事ができる。井草式土器の地域性については、谷口康浩氏が最近の発掘調査成果を纏め、J型優勢の下総相、Y型優勢の三浦・君津相、J Y型・Y型・J型をともに含む多摩相の地域相として把握している。（谷口1987）ここでは、前述した4段階細分に従って各地域における土器群の変遷を辿りながら、その様相を詳細に見ていくことにする。

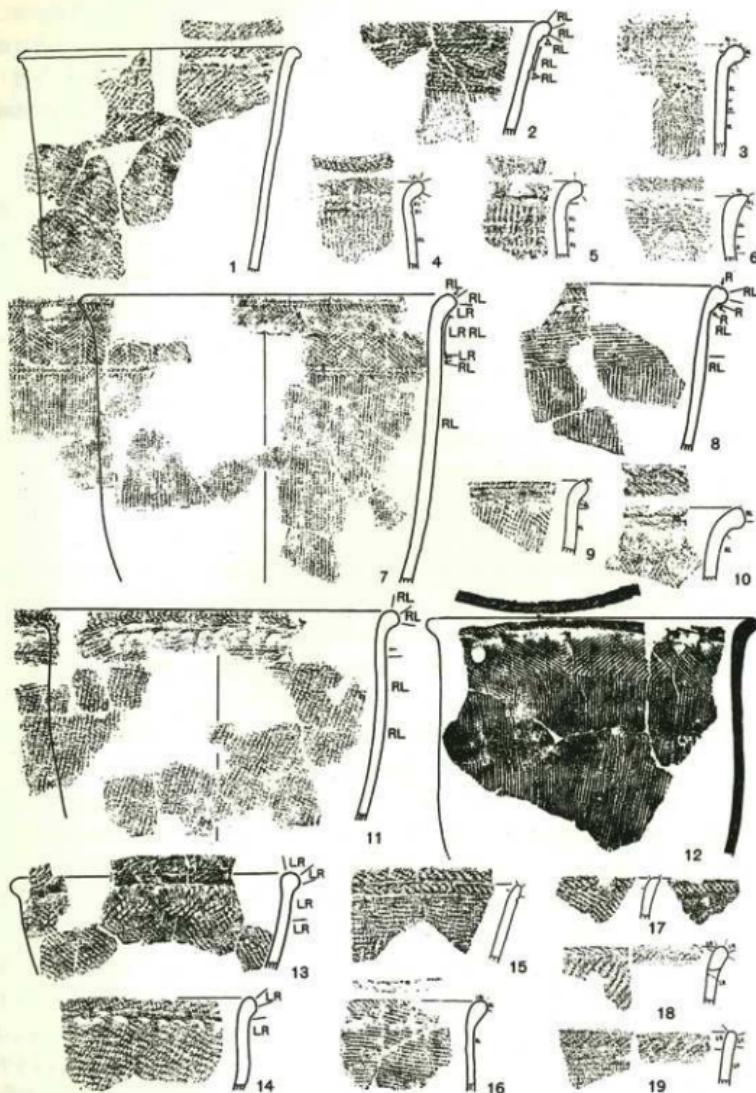
（1）千葉県

近年、資料の増加が最も著しい地域であり、新東京国際空港No.7遺跡を初めとしてその出土量の豊富さは、井草式土器の中心地域である事を示している。千葉県における各遺跡では、新東京国際空港No.7遺跡、木の根No.6遺跡の新東京国際空港地域、高根北遺跡、雨古瀬遺跡、櫻崎遺跡などの千葉ニュータウン地域及び、東寺山石神遺跡は第1段階から第4段階まで連続して出土している。これらの遺跡では第4段階以降も撫糸文系土器群全時期を通して連続しており、このような連続性のある大きな遺跡が多数存在する事が千葉県の特徴とも言える。また、従来の井草式土器の枠に入らない土器もかなり確認されて来ている。下総台地では第1段階から第4段階までJ型が優勢であるが、第2段階では、J Y型が見られ、第3段階、第4段階ではY型の存在も顕著になってくる。房総半島の東京湾沿岸地域では、第4段階にY型が優勢になり三浦半島地域の影響下に入った事が窺える。

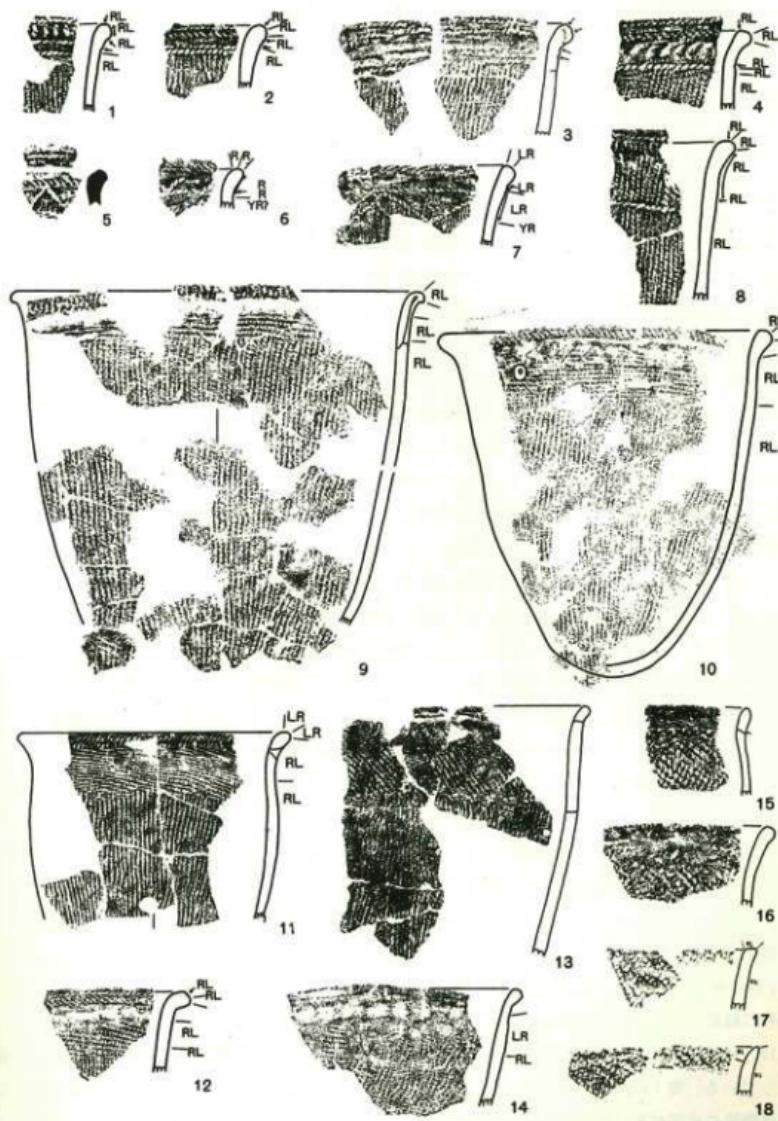
第1段階（第2図）

口唇部、口縁部文様帯に、押圧縄文と縄文を重複施文する土器、及びLRとRL原体の組み合わせにより羽状縄文を作る土器が多く特徴的である。押圧縄文は直線的に横位に巡るものと、口縁部に鋸歯状山形文を描くもの、縦位施文のものがある。押圧縄文、縄文とも原体はLR、RLの2段の撫紐が主体である。1～6、8、11は口縁部文様帯に縄文と押圧縄文を重複施文する土器である。1は口唇部から口縁部に縄文を横位に施文し、胴部以下は縦位に施文し幾らかの羽状効果を出している。口唇部に1条、口縁部に2条の押圧縄文を巡らしている。4、5の口縁部はRLの縦走縄文の上に、RLの押圧縄文を4は2条、5は3条施文している。2、3の口縁部はRLの縄文に重ねて、上下2条の押圧縄文により文様帯を区画し、区内に押圧縄文による鋸歯状山形文を描いている。3は口唇部内面にも押圧縄文を1条めぐらしている。6の口縁部は横走縄文に重ねて押圧縄文の鋸歯状山形文を描いている。8は横走縄文の口縁部文様帯上部に原体Rの押圧縄文を2条めぐらした、IIa+IIbの構成を探る土器である。11は横走縄文の口縁部文様帯下部に押圧縄文を1条めぐらし、上部には指頭押圧文を施文している。

7、9、10、12は口縁部文様帯に羽状縄文を持つ土器である。7は原体LR、RL2種の縄文を横位に施文して羽状縄文を作り、また同じ原体による押圧縄文2本を組み合わせて文様帯の下部を区画し、さらに縦位に施文して縦区画の効果も強めている。LRとRLを組み合わせた押圧縄文は筋が羽状効果を持っている。口唇部にも1条押圧縄文が施文されている。9、10はRLの縄文を方向を変えて施文し羽状縄文を作っている。9の口唇部と口縁部上部には押圧縄文が1条巡る。10の口唇部内面には、Rの押圧縄文により鋸歯状山形文が描かれている。12は口唇部、口縁部ともLR、RL2種の縄文によって羽状縄文が作られている。



第2図 千葉県第1段階の土器 高根北4・5・6・9・18・19 新東京国際空港No7、2・7・8・11・13・14 木の根No6、3・16 横峰1・10 西之城12 布佐余間戸15・17



第3図 千葉県第2段階の土器 新東京国際空港No7、1・2・4・6~12・14 西之城5 雨古
瀬3 西の台13・15・16 高根北17・18

2~12は口唇部が肥厚外反し、口縁部文様帯を持ち、胴部に縱走縄文を施文する井草I式の特徴が強い土器であるのに対して、13~19はその1つが欠けやや様相を異なる土器である。13は口唇部から口縁部にかけてL Rの縄文を横位に施文し、胴部は縱位施文の斜縄文が続く。14も口唇部、口縁部にかけてL Rの縄文を施文している。16は口唇部から口縁部にかけてR Lの縄文を施文している。口縁部は筋の細かい横走縄文である。13、14、16、は胴部にも斜縄文や横走縄文が続くと思われ、その結果口縁部文様帯が、明確でない土器である。

15、17~19は口唇部内面にまで縄文施文が及ぶ土器である。L RまたはR Lの斜縄文、横走縄文により口縁部文様帯を構成している。胴部は縱走縄文と考えられる。これらの土器は、文様構成は井草I式の特徴を持つが、口唇部の肥厚外反が顕著ではない。

13~19は口縁部文様帯が幅広く丁寧に施文されている事から第1段階に比定した。

第2段階（第3図）

口縁部文様帯に横走縄文か斜縄文を持ち、胴部に縱走縄文を施文する典型的な井草I式土器が主体を占めるようになる。押圧縄文は口縁部文様帯が退化した形で施文される。

1~4は第1段階のII a + II b文様帯のうちII a文様帯だけになった土器である。1は口縁部文様帯の無文部に2条の押圧縄文をめぐらし、口唇部にも押圧縄文を上端に1条施文して更に縱位に施文している。2は1とほぼ同様の構成であるが、口唇部の縱位の押圧縄文の代わりにR Lの縄文を施文している。3は口縁部と口唇部に各々2条の押圧縄文をめぐらしている。4は指頭押圧文により口縁部無文帯を作り、無文帯の下部を押圧縄文で区画している。

5~7は押圧縄文で鋸歯状山形文を描く土器である。口縁部文様帯の幅が狭くなったために、5、6は口唇部近くにまで文様がせり上がり、7は胴部文様帯に重ねている。7の胴部はRの撚糸文が縱走し、この地域では珍しいJ Y型土器である。8は口縁部文様帯もR Lの縱走縄文であり、1条の押圧縄文で胴部文様帯と区画している。

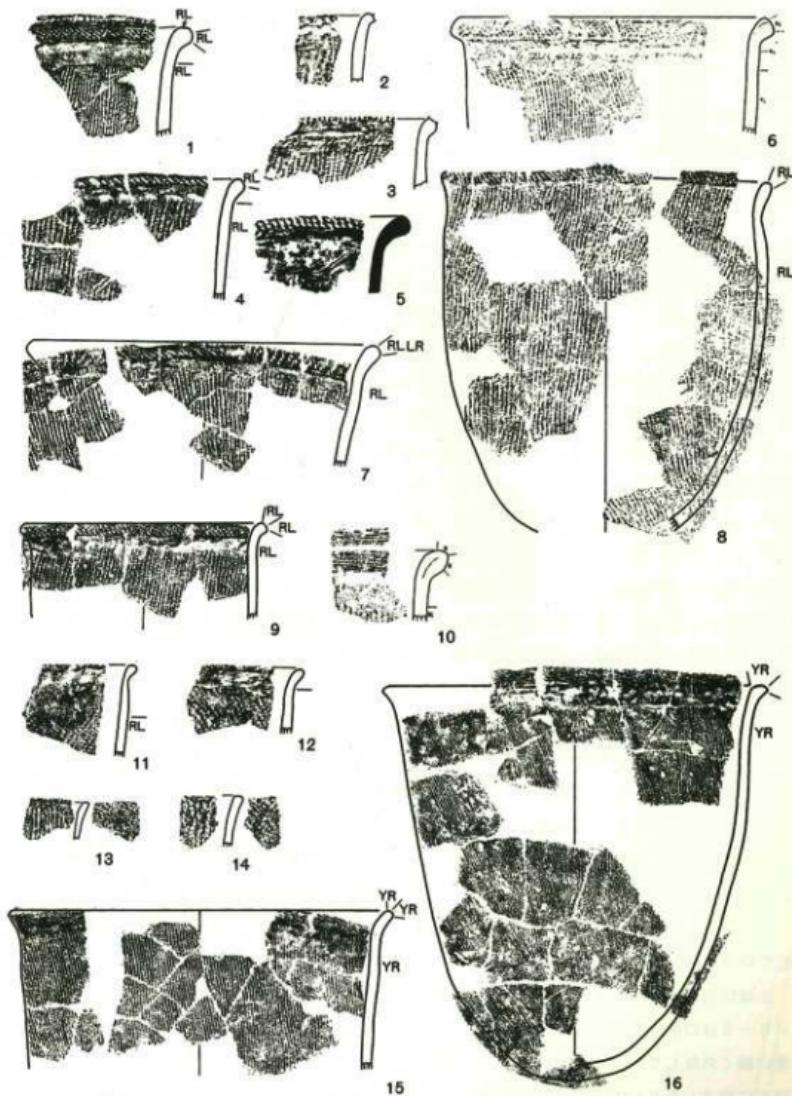
9~12は口縁部文様帯に横走縄文か斜縄文を持ち、胴部に縱走縄文を施文する典型的な井草I式土器である。9、10は横走縄文、11、12は斜縄文である。9、10、12は口唇部下の括れ部に指頭押圧文が巡っている。

13~18は口唇部の肥厚外反が顕著でなく、文様構成も從来の井草I式土器とやや異なる土器である。13はRの縄文により口縁部に斜縄文、胴部に縱走縄文を施文し、その境には原体末端の縛り部分の回転痕がついている。口唇部はRの縄文が施文されているが明瞭ではなく、肥厚していない。口唇部下に爪形文がみられる。14~16は口唇部に横ナデによる幅1~2cmの無文帯を持つ土器である。14の無文帯下部には指頭押圧文が巡り、口縁部以下にはL RとR Lの斜縄文が施文されている。15の口縁部はR L R、16の口縁部はR Lの斜縄文である。

17、18は口唇部内面に縄文施文が及ぶ土器である。口唇部内面、口縁部ともにR Lの斜縄文を施文している。第1段階の口唇部内面施文の土器（第2図15、17~19）と比較して、縄文施文が粗く文様構成の意図が薄い事から若干新しく考えた。

第3段階（第4図）

口縁部文様帯がいっそう狭くII a部分の幅だけになり、指頭押圧文やなぞりによる無文帯が顕著



第4図 千葉県第3段階の土器 新東京国際空港No7、1・4・5・7・8・9・11・12・15・16
笠木山2・3 高根北6 東寺山石神10 雨古瀬13・14

になる。無文帯に刺突文、爪形文を施文する土器が増える事も特徴である。J型土器が主体を占めるが、Y型土器の出土も目立ってくる。

1～7、9、10は口縁部のIIa部分に無文帯を持つ土器である。1はRLの原体で口唇部に斜繩文、胴部には縱走繩文を施文している。口唇部には押圧繩文が1条巡る。2～4の無文部には2は爪形文、3は1条の押圧繩文、4は刺突文が施文されている。5は口唇部の外反が大きく、無文部が広い。6、7、9は次の第4段階の土器と比べると、口唇部の肥厚外反が強く文様帯幅が広い。7はRLとLRの2種の繩文によって羽状繩文を構成している。6、7、9は、口縁部文様帯は省略化されて無文帯になったが、口唇部にはまだ文様帯作成の意図が残されている土器と捉えられよう。8は口縁部に無文帯も持たない土器であるが、口唇部に突起が付き文様帯幅がやや広く、文様帯作成の意図が強い事からこの段階に考えた。10は口唇部にRの撚糸文、胴部にRLの繩文を施文した特異な構成を持つYJ型土器である。

11～14は従来の井草式土器の特徴を満たしていない土器である。11、12は口唇部に横ナデによる幅1～2cmの無文部を持つ。口縁部以下は繩文が施文される。第2段階の口唇部無文帯の土器（第3図15、16）と比較して口縁部以下の繩文が縱走化している事から若干新しく考えた。13、14は口唇部内面にも繩文が施文される土器である。表面は口唇部下から繩文が縱走している。繩文の縱走化から第3段階の口唇部内面施文土器（第4図17、18）より新しく置いた。

15、16はY型土器である。Rの撚糸文を口唇部は斜走または横走させ、胴部は縱走施文している。15は口唇部に2段施文し、16は口唇部施文が若干内面にまで及び、口縁部には無文部を持っている。口縁部の無文帯は、J型土器には顕著に示されるが、Y型土器にはあまり見られない。J型土器の口唇部、口縁部文様帯構成との類似から第3段階に位置づけた。

第4段階（第5図1～9）

口縁部文様帯が消失し、口唇部文様帯と胴部文様帯の構成になり、文様帯構成としては安定する。その結果、J型土器、Y型土器とも各遺跡において極めて齊一性のある様相となっている。J型土器が主体を占めているが、房総半島の東京湾沿岸の苗見作遺跡（石田1980）ではY型土器が主体を占め、この段階にY型土器優勢の三浦半島地域の影響下に入った事が窺える。新東京国際空港No.7遺跡でもY型土器はかなりの量を占めており、Y型土器の進出が千葉県全体に及び始めたと言えよう。

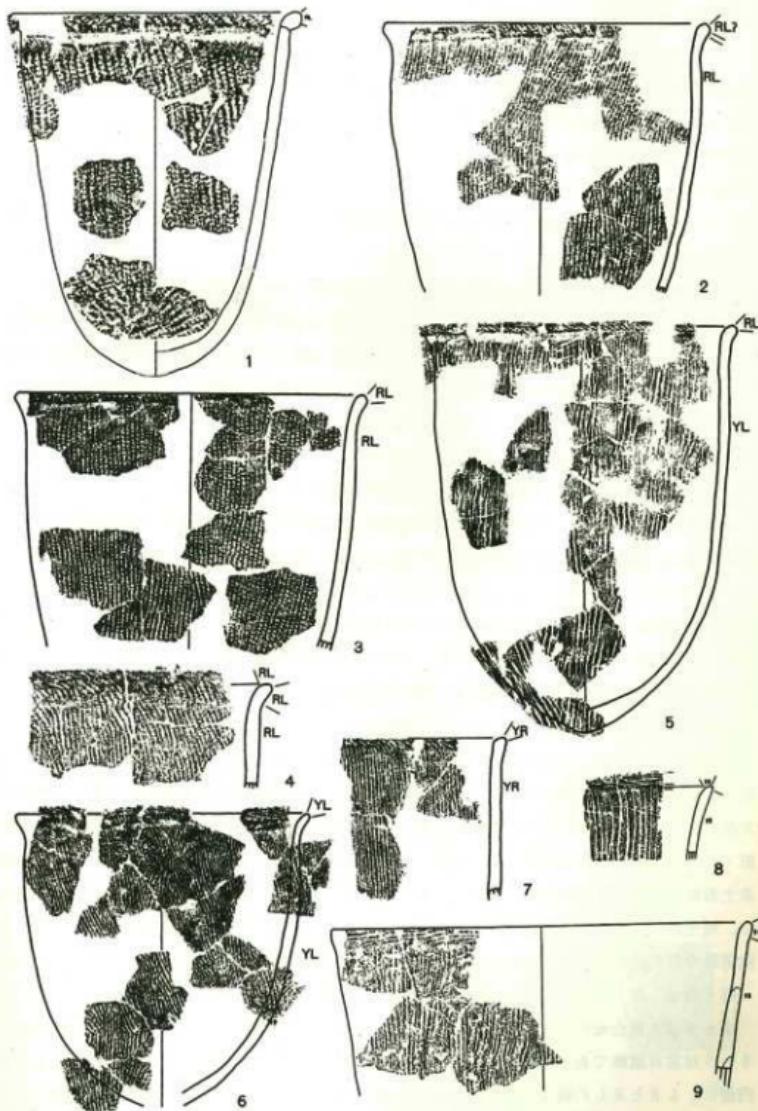
1～4はJ型土器である。いずれもRLの繩文により、口唇部は斜繩文、胴部は縱走繩文を施文している。口唇部の肥厚外反は弱くなるが、Y型土器と比較すると前段階の形を留めている。

5は口唇部にRLの繩文、胴部にLの撚糸文を持つJY型土器である。

6～9は口唇部、胴部に撚糸文を施文するY型土器である。口唇部の肥厚外反は全く見られず、逆に細く外反している。そのために、口唇部の施文が8のように内面に及んだり、9のように口唇部下に施文したりしている。Y型土器に口唇部内面施文が多いのは、口唇部形態と関連したものと考えられる。

（2）栃木県、茨城県

栃木県、茨城県は、井草式土器の中心地である千葉県の北部に隣接する地域でありながら、意外



第5図 千葉県第4段階の土器 西の台1 新東京国際空港No7、2~7 苗見作8・9

と資料が少ない。最近になって、栃木県では宇都宮青陵高校地内遺跡（斎藤1986）、東野田遺跡（栃木県文化振興事業団1988）等において第2段階以降の土器が纏まって出土して来ているが、第1段階の土器はまだ確認できない。今後、第1段階の土器が若干量出土する事は十分考えられるが、この地域における第2段階からの遺跡の出現は、井草式土器の成立が千葉県を中心とする南関東地方にあり、第2段階になってこの地域に分布が拡大してきた結果と考えられよう。第2段階以降第4段階までJ型土器が優勢である。

第2段階（第6図1～9）

口唇部文様帯に1段か2段の縄文、口縁部文様帯に横走か斜走の縄文、胴部文様帯に継走縄文を施文する齐一性のある土器が主体である。

1は口唇部に1条の押圧縄文が巡る。1～4は口縁部上部に指頭押圧文を施し、5、6、8、9は横ナデを施している。4の指頭押圧文は深く、爪痕が明瞭な爪形文になっている。口縁部文様帯は、1、2、4、5、6は横走縄文、3、8、9は斜走縄文である。縄文の原体はRL、LRを使用している。7は無文の口唇部が外反し、口縁部以下に斜走縄文が施文される土器で、室谷上層土器に類似する土器と考えられる。

第3段階（第6図10～17）

口縁部に横ナデあるいは指頭押圧文による無文帯を持つ土器が多い。10～12、14～16は横ナデ、13は指頭押圧文である。14は無文部に押圧縄文による鋸歯状山形文を描き胴部と区画している。千葉県の第2段階の鋸歯状山形文が残存した形といえる。10～17の口唇部、胴部文様はいずれも縄文である。

第4段階（第6図18～22）

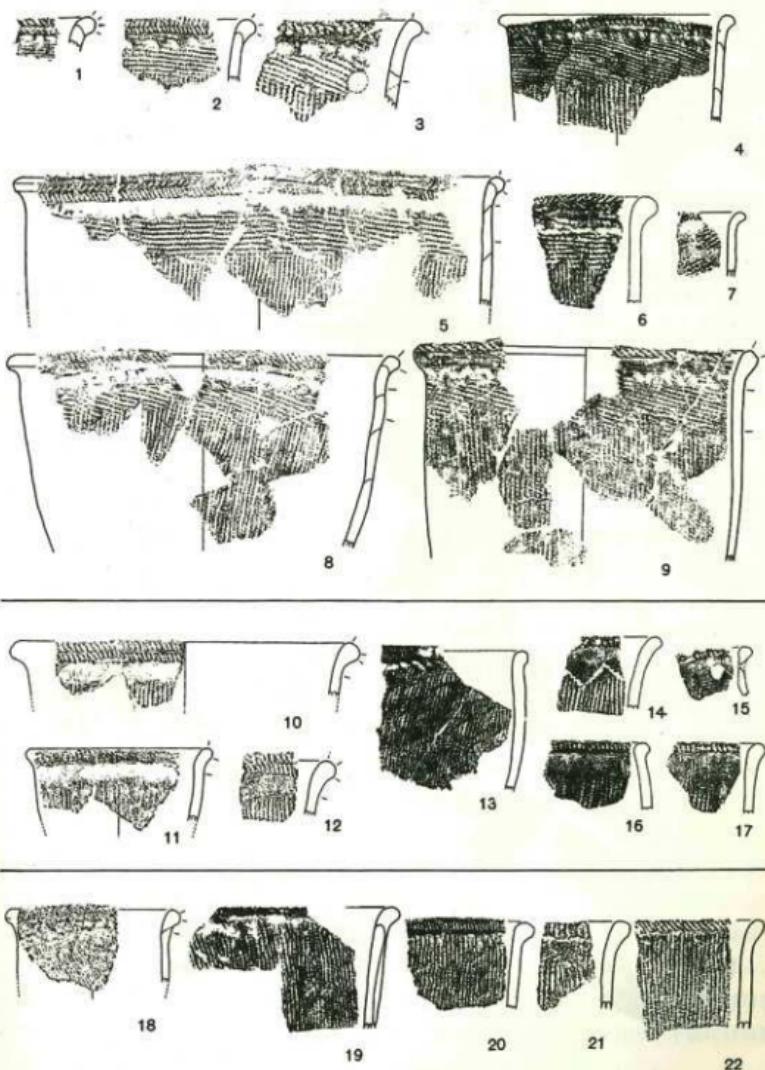
口唇部に斜走縄文、胴部に継走縄文を施文するJ型土器が主体である。18、19のように口縁部無文帯が若干残る土器もあり、第3段階から極めて連続的である。

（3）埼玉県

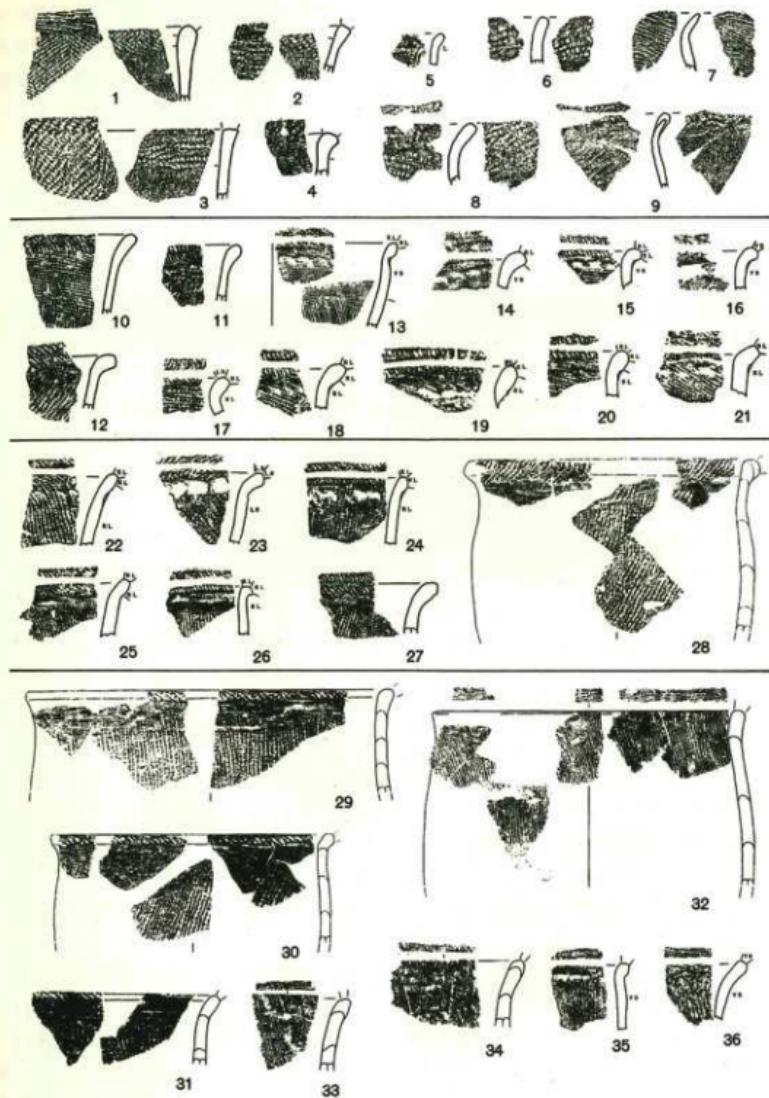
関東地方の中央部に位置するが、井草式土器が纏まって出土する遺跡は少ない。大宮台地では千葉県に類似する様相を呈し、J型土器が優勢である。宮林遺跡等の県北部では、第1、第2段階は井草式土器よりも表裏縄文系土器群の影響が強く見られ、更に山地よりの秩父市橋立岩陰遺跡（吉田・芹沢他1967）では表裏縄文系土器群が主体を成している。橋立岩陰遺跡については、表裏縄文系土器群が主体となる群馬県石畑岩陰遺跡と併せて、周辺の土器群として次章で取り上げる事にする。埼玉県の山地寄りから群馬県の地域において井草式土器が主体を持つようになるのは、橋立岩陰遺跡や群馬県中棚遺跡（富沢1985）が示すように第4段階の井草Ⅱ式になってからである。

第1段階（第7図1～9）

1～4は大宮台地の上尾市12番耕地遺跡（細田1985）、5は西大宮バイパスNo.4遺跡（山形1986）、6～9は宮林遺跡である。1～3は口唇部内面に縄文施文が及ぶ土器である。1は口縁部と口唇部内面に、LRとRLの縄文により羽状縄文を描いている。3は口縁部に斜走縄文、口唇部内面に横走縄文を施文する。口唇部が若干肥厚外反している。千葉県布佐余間戸遺跡に類似する。5は口縁部にLの押圧縄文により横位、縦位の区画状の文様を描いた土器である。



第6図 栃木県、茨城県第2～4段階の土器 宇都宮青陵高校1～3・5・8・9・10～12・18
東野田4・19 緑山7・21 烏森13・20・22 小川6 下中丸14・15 祝町16・17



第7図 埼玉県第1～4段階の土器 上尾十二番耕地 1～4 西大宮BPNo 4・5・13～26・35・
36 宮林6～9 寺山10～12・27 呉原28～34

6～9は口唇部内面にまで施文が及ぶ土器である。7は表裏撲糸文土器である。8は口縁部、口唇部に斜繩文が施文される。9は口唇部に突起を持っている。7～9は口縁部がくの字状に屈曲する特徴を有し、橋立岩陰遺跡、石畳岩陰遺跡出土土器に類似する表裏繩文系土器である。

第2段階（第7図10～21）

10～12は県西部に位置する寺山遺跡（高野1976）出土土器である。10、12は口縁部文様帯に斜繩文を施文する。11は口縁部文様帯に横走撲糸文を施文している。13～21は西大宮バイパスNo.4遺跡出土土器である。13は口唇部に繩文、口縁部に横走撲糸文、胴部に撲糸条痕文を施文した特異なJ Y型土器である。14～16の口縁部にも横走撲糸文が施文され、16は口唇部も撲糸文である。17～21は口縁部に斜繩文の文様帯を持つJ型土器と思われる。13～16、18～21の口縁部上部には爪形文状の指頭押圧文が巡っており特徴となっている。11、13～16の横走撲糸文は、東京都、神奈川県の関東地方西部に特徴的な文様で、18～21の指頭押圧文を持つJ型土器は千葉県、栃木県の関東地方東部に主体的に分布する土器であり、埼玉県の中間的な様相を良く表していよう。

第3段階（第7図22～28）

口縁部に指頭押圧文、横ナデによる無文部が巡る土器が主体である。22～27は口唇部に2段の繩文を施文している。22、24の口縁部は指頭押圧が強く、連続する爪形文になっている。26～28の口縁部は横ナデによる無文部である。

第4段階（第7図29～36）

J型土器には口縁部無文帯が残る傾向があるが口唇部の肥厚は弱くなっている。Y型土器がかなりの量を占めるようになる。29～31はJ型土器、32～36はY型土器である。29～34の久原遺跡（齊藤1985）はこの段階の纏まった好資料である。

（4）東京都

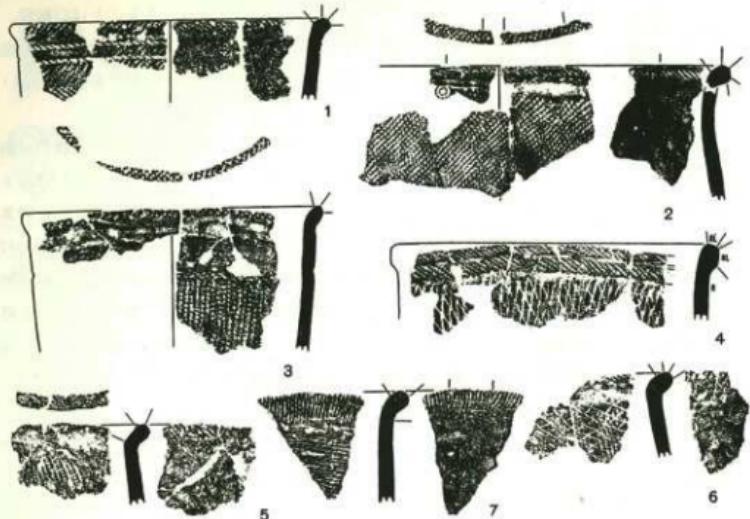
多摩ニュータウンNo.52遺跡を中心とする多摩丘陵に遺跡が集中しているが、多摩ニュータウンNo.52遺跡以外は資料が少ない。多摩丘陵から武藏野台地に及ぶ関東地方西部において、遺跡が爆発的に増加してくるのはY型土器が優勢になる第4段階以降から撲糸文系土器群後半になってからである。第1、第2段階ではJ型土器が主体であるが、J型土器の口縁部文様帯に撲糸文を使用する土器が多く、第1段階から繩文と撲糸文を併用する地域性をもっている。

第1段階（第8図）

口縁部文様帯に押圧繩文、羽状繩文、横走撲糸文、網目状撲糸文など多種類の文様があり、多様性に富んでいる。

1は口縁部文様帯に2条の押圧繩文と羽状繩文を持ち、報文においてJ型a類土器として抽出された土器である。2は口縁部文様帯の区画を持たないが、口縁部以下胴部に斜繩文が施文される。口唇部は肥厚外反が強く、L R、R L 2種の繩文を交互に施文して羽状繩文をしている。3は口縁部文様帯に撲糸文を横走施文している。撲糸文の上部は横ナデにより無文部を作り、下部には少しき程回転した押圧繩文を施文して胴部文様帯と区画している。

4、6は口縁部に網目状撲糸文を施文する土器である。4は縦位に、6は横位に網目状撲糸文を施文している。6は地文に繩文が施文されている。5は口縁部に太さの違うLの撲紐を撲り合わせ



第8図 東京都第1段階の土器 多摩ニュータウンNo52、1～3・5・6・7 多摩ニュータウン
No99、4

たR Lの斜縄文を施文している。口唇部の括れ部は無文帶になり、口唇部内面に縄文が及んでいる。7はY型土器と思われる。撚糸文により、口縁部文様帶は縦位と横位の2段に施文し、口唇部は縦位施文が内面にまで及んでいる。口縁部文様帶の構成が2段である点から第1段階に位置づけた。

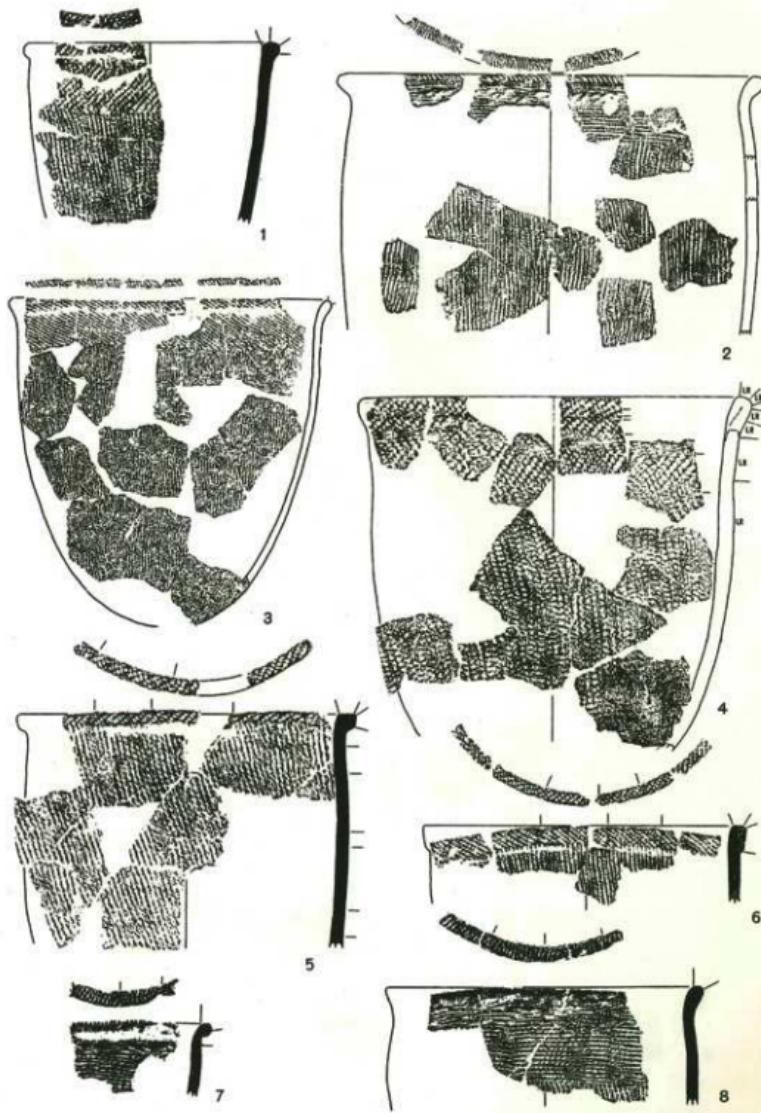
第2段階（第9図）

口縁部文様帶がJ型土器は斜縄文か横走縄文、Y型土器は横走撚糸文が施文され、典型的な井草I式土器が主体を占めるようになる。J Y型土器が顯著になる地域性が現れる。

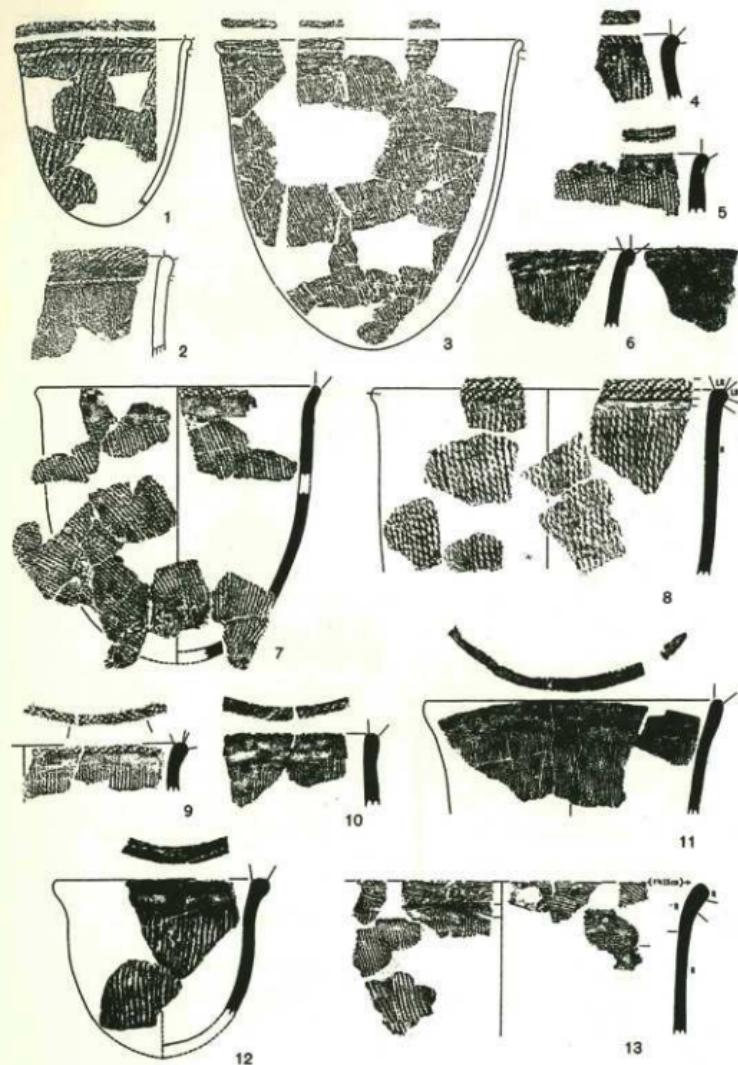
1はL Rの縄文により、口唇部に斜縄文を2段、口縁部に斜縄文、胴部に縦走縄文を施文している。3もほぼ同じ構成であるが縄文の原体はR Lである。2は横走縄文の口縁部文様帶上部に指頭押圧文が巡っている。多摩ニュータウンNo.406遺跡出土土器であるが、このような口縁部文様帶は千葉県、栃木県の関東地方東部に特徴的に存在している。4はL Rの縄文により、口唇部、口縁部は斜縄文、胴部は縦走縄文を施文しているが、文様帶の区画があまり明確ではない。

5、6はJ Y型土器である。口縁部文様帶は持たないが口唇部文様帶を幅広くとる事によりその代わりを果たしていると考えられる。5、6とも口唇部はL RとR L 2種の縄文により羽状縄文を描き、胴部は若干斜めに撚糸文を施文している。口縁部文様帶の口唇部への集中化は、千葉県の第2段階においても見られた傾向である。

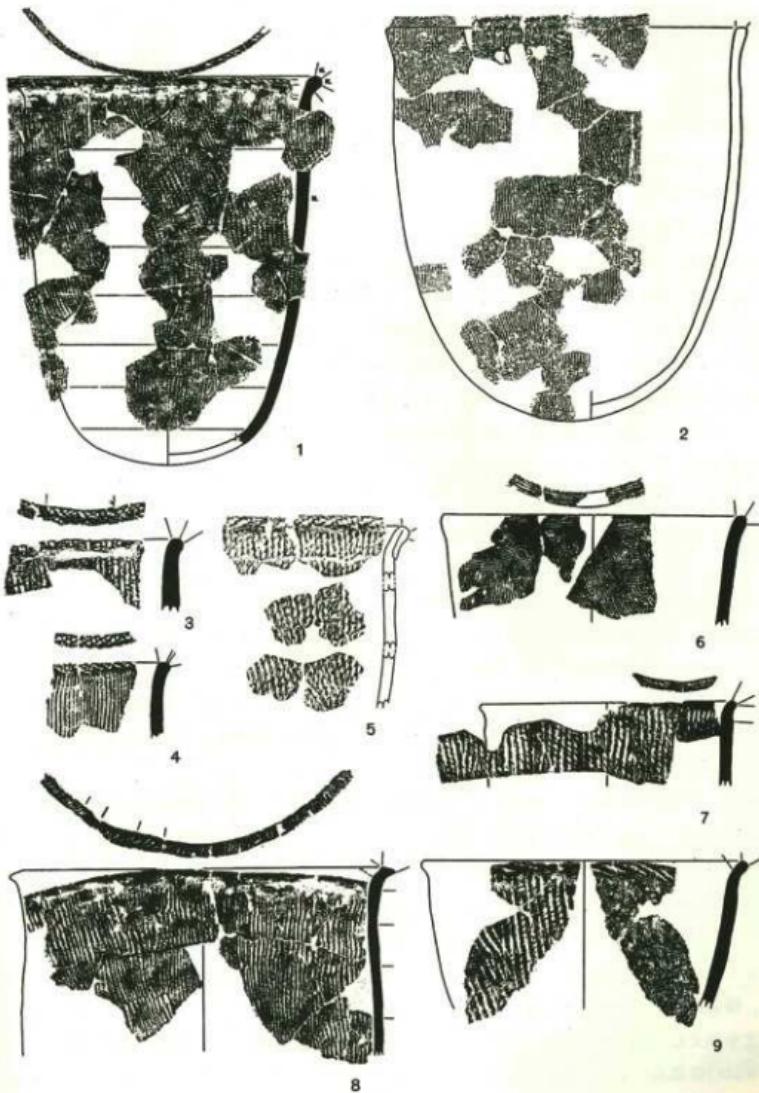
7、8はY型土器である。口唇部は縦位、口縁部は横位、胴部はやや斜めの縦位に撚糸文を施文している。第1段階の第8図7では縦位撚糸文が施文されていた口縁部文様帶上部が、横ナデによる無文帶となっている。



第9図 東京都第2段階の土器 多摩ニュータウンNo52、1・5~8 多摩ニュータウンNo406。
2 多摩ニュータウンNo99、4 多聞寺前3



第10図 東京都第3段階の土器 多聞寺前1～3 多摩ニュータウンNo52、4～7・9～12 多摩
ニュータウンNo99、8 多摩ニュータウンNo188、13



第11図 東京都第4段階の土器 多摩ニュータウンNo52、2～4・6～9 多摩ニュータウン
No99、1 小山田No15、5

第3段階（第10図）

幅の狭い口縁部文様帯に、押圧繩文、爪形文、横ナデによる無文帯を持つ土器が主体である。J型、J Y型、Y型土器のいずれにも同様の文様が見られるが、無文帯を持つJ Y型及び、Y型土器の存在が顕著である。

1～3はこの段階の資料が纏まって出土した多聞寺前遺跡の土器である。1は口唇部に斜繩文、口縁部に1条の押圧繩文、胴部に縦走繩文の構成を持つJ型土器である。原体はいずれもR Lである。2は口唇部にR Lの繩文、口縁部にR Lの押圧繩文、胴部にRの撫糸文のJ Y型土器である。3は口唇部、胴部にRの撫糸文、口縁部にRの押圧繩文を施文したY型土器である。

4～6は幅1～2cmの口縁部無文帯を持ち、無文帯と胴部文様帯の境に、4は刺突文、5は爪形文、6は爪先に繩を密着した押圧文がめぐる。4はJ型、5はY型土器で、6はY型かJ Y型と考えられる土器である。7～10は口縁部に無文帯を持つJ Y型土器である。11、12は口縁部に無文帯を持つY型土器である。撫糸文を口唇部は横走、胴部は縦走施文している。

13は口唇部内面深くにまで撫糸文が施文される表裏撫糸文土器である。口縁部に撫糸文を横走しその下に横ナデによる無文部を作っている。撫糸文の原体はRである。口縁部、胴部の文様構成から第3段階に位置づけた。

第4段階（第11図）

口縁部文様帯が消失し、無文帯も若干残る程度になり、Y型土器が主体を占めるようになる。

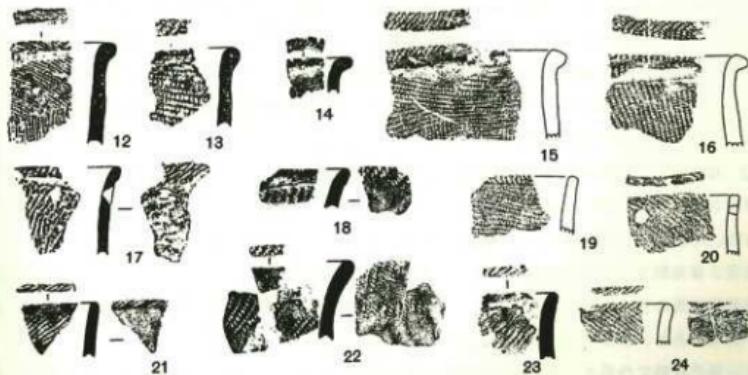
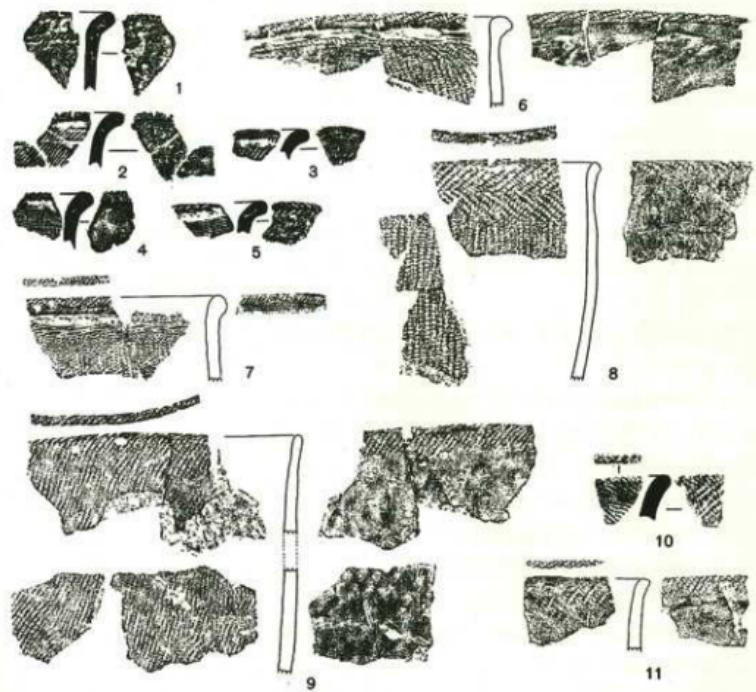
1、3は口唇部、胴部にR Lの繩文を施文したJ型土器である。4、5は口唇部に繩文、胴部に撫糸文のJ Y型土器である。5は口縁部が肥厚して段を呈し文様帯の意識が残っている。2、6～9は口唇部、胴部に撫糸文を施文するY型土器である。6は撫糸文を横位、縦位に重ねている。7は口縁部で撫糸文を反回転した後、胴部に続けて施文している。5と同じように口縁部文様帯の意識が残存したものであろう。9は口唇部内面に撫糸文が施文されている。第3段階の第10図13から統く文様構成で、口唇部内面施文は第3、第4段階のY型土器に特徴的な文様である。

（5）神奈川県

撫糸文系土器群の編年確立の舞台になった地域であるが、井草式土器は意外と纏まった資料が少ない。特に第1～第3段階は井草I式土器が少なく、かえって周辺の表裏繩文系土器が流入している。この地域で遺跡が増加し資料が豊富になるのは、Y型土器が優勢になる第4段階井草II式（大丸式）土器が確立してからである。

第1段階（第12図1～11）

1～5は馬の背山遺跡出土土器である。1は口唇部及び内面に横走撫糸文を施文し、口縁部は斜繩文、横走撫糸文、斜繩文と組み合わせて文様帯を構成している。2、3も口唇部及び内面に横走撫糸文を施文し、口縁部に斜繩文がある。4は口唇部及び内面が繩文で、口縁部は横走撫糸文である。5は口唇部及び内面に繩文を施文し、口縁部には1条の押圧繩文と横走繩文を施文している。1～5は口唇部及び内面の施文に撫糸文を持つ特異性はあるが、口縁部文様帯は押圧繩文、斜繩文、横走撫糸文のうち2種の文様で構成しており、多摩ニュータウンNo52遺跡の土器（第8図1）と類似している。



第12図 神奈川県第1、第2段階の土器 馬の背山1～5・14 東福寺北6～9・11・19～22・24
平横山12・13・15 大船山居10・16～18・23

6～9、11は多摩ニュータウン地域に近い横浜市東福寺北遺跡の土器である。6は口唇部に縄文、口縁部に1条の押圧縄文と斜縄文を施文している。7は口唇部に縄文、口縁部に横走撲糸文を持つ。8は口縁部にLRとRL2種の縄文により羽状縄文を描いている。6～8が口縁部文様帯を構成する井草I式土器であるのに対し、9～11は口縁部文様帯が区画されず内面施文を特徴とする表裏縄文系土器に類似する。9は内面に指頭調整痕があり、石畳岩陰遺跡の土器と同様草創期的成形手法を残している。

第2段階（第12図12～24）

第1段階同様、口縁部文様帯を構成する井草I式土器と、口縁部文様帯が明確でない表裏縄文系土器類似土器が併存している。平根山遺跡ではこのような2種の土器（12、13、17）が出土している。

12～16は口縁部文様帯に斜縄文または横走縄文を施文する土器であり、口唇部は肥厚外反し縄文が施文されている。

17～24は口縁部文様帯の区画が明瞭でなく口唇部が肥厚しない土器である。いずれの土器も縄文施文である。17、18、21、22、24は口唇部内面に縄文が施文されている。

第3段階（第13図1～11）

井草I式土器は口縁部文様帯が狭くなり、刺突文や無文帯だけの構成になる。口縁部に1は刺突文が巡り、3は竹管文が施文されている。4、5、6、7は口縁部に無文帯を持つJ型土器である。8、9は口縁部に無文帯を持つY型土器である。10、11は口唇部に無文帯を持ち、口唇部内面に撲糸文が施文される表裏撲糸文系土器である。第2段階では表裏縄文の土器が主体であったが、撲糸文が優勢になってくる第3、第4段階では表裏撲糸文の土器が多い。

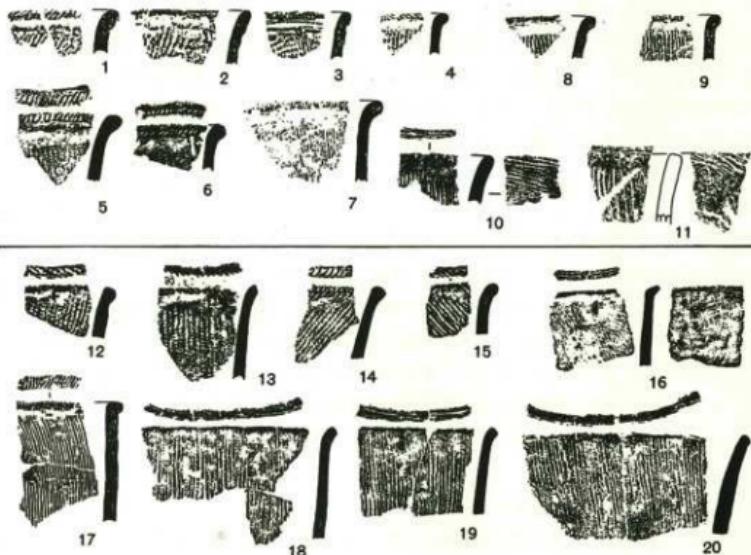
第4段階（第13図12～20）

大丸遺跡に代表されるように、Y型土器が急増して主体を占めるようになる。12～15はJ型土器、16～20はY型土器である。Y型土器は撲糸文を口唇部は横走、胴部は縦走施文する土器が多い。16は口唇部内面にまで施文される。口唇部内面に撲糸文が施文される土器は、向原遺跡（服部1982）に示されるように、次の夏島式段階にまで続いている。

以上、各地域の様相について段階を追って見てきたが、その結果、井草式土器の地域色について次のような点を指摘できよう。

① 井草式土器の成立期である第1段階は、口唇部の肥厚外反、口縁部文様帯の作成という方向は一致して見られるが、地域によってさらには遺跡によって土器が異なり、かなりの地域色が認められる。千葉県の下総台地では、口縁部文様帯にRLとLRの2種の原体を用いて、押圧縄文、羽状縄文、横走縄文、斜縄文を描くJ型土器が主体を占めるが、東京都多摩ニュータウンNo.52遺跡や神奈川県馬の背山遺跡では、口唇部、口縁部文様帯に横走撲糸文、網目状撲糸文など撲糸文の使用が顕著であり、J型土器とともにY型土器が存在する。

② 第2段階になると、千葉県を中心として口縁部文様帯に横走縄文か斜縄文を持つ典型的な井草I式のJ型土器が完成し、関東地方全体に分布が及ぶようになる。その結果、撲糸文指向の関東地方西部にY型土器、JY型土器の存在が顕著であるが、関東地方全体としての画一性が認められ



第13図 神奈川県第3、第4段階の土器 平根山1~4・7・17 夏島5・8・9・13・14
大丸12・15・16・18~20 馬の背山6 大船山居10 代官山11

るようになる。また、千葉県、栃木県、埼玉県の大宮台地では口縁部文様帯上部に指頭押圧文を巡らす土器が多く、関東地方東部という地域性が一方では現れてくる。

③ 第2段階で認められた関東地方全体としての画一性は、第3段階、第4段階ではいっそう強まるが、西部の撚糸文指向も顕著になり、Y型土器優勢の西部、J型土器優勢の東部という地域性が出現する。その傾向は、地域色が残っていた口縁部文様帯が消失し、井草II式土器が完成した第4段階に最も良く示されている。

④ 口唇部が肥厚せず、文様帯構成が明瞭でない従来の井草式土器の範疇に入らない土器として、表裏施文の土器と口唇部に無文帯を持つ斜縄文の土器を抽出することができた。表裏施文の土器は既に指摘されているように、中部地方に分布する表裏縄文系土器群との関連が考えられる。それは、表裏施文の土器及び口唇部内面施文のある井草式土器の分布の中心が、関東地方西部にある事からも窺える。口唇部に無文帯を持つ斜縄文の土器は、千葉県において最近検出されており、室谷上層土器群との関係が考えられるかもしれない(註3)。

⑤ 口縁部文様帯に押圧縫文、羽状縫文、横走撚糸文、指頭押圧文など多種の文様を持つ第1段階の土器群は、表裏縄文系土器群、室谷上層土器群といった併行する周辺の土器群と類似するばかりでなく、その文様の多様性の中には室谷下層式、大谷寺Ⅲ式、仲道A式などの前段階の土器群と

の関連が強く認められる。

次に④、⑤の関係を探るため、IV章では関東地方北部から中部地方に分布する表裏縄文系土器群及び室谷上層土器群といった周辺の土器群について検討し、統一して、V章では中部、関東地方の井草式直前段階の土器群を検討し、井草式土器と周辺の土器群の成立を辿る中から、これらの土器群の相互関係を考えてみたいと思う。

IV 周辺の土器群の検討

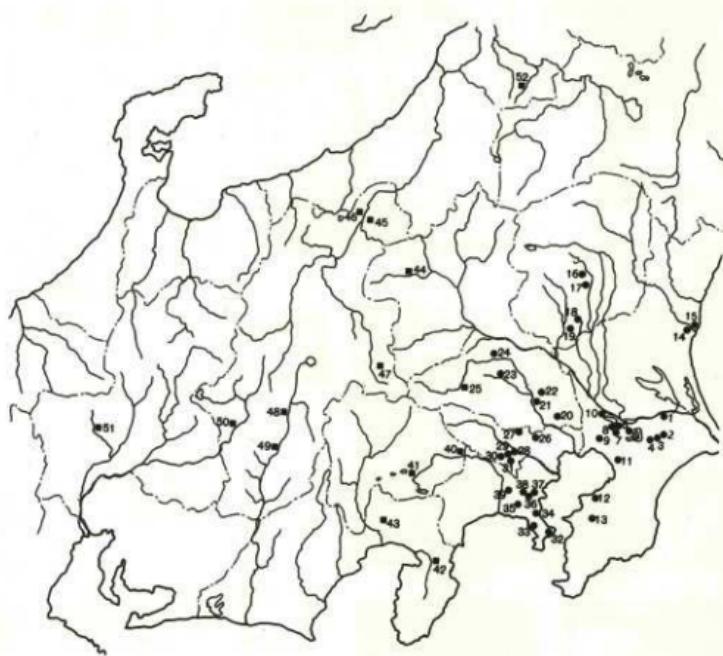
前章では関東地方を中心に分布する井草式土器とそれに伴出する異系統の土器について検討してきたが、本章では井草式土器が主体とならない周辺地域の土器群について検討を加えてみたいと思う。また、井草式土器を主体としない地域でも数片の井草式土器を始め、少量の撫糸文系土器を伴出する遺跡もあり、在地の土器群とそれらを分けて最後にその様相を観ていきたい。井草式土器が主体となる地域は、第14図に見られる如く関東地方南部の台地から丘陵部の狭い地域に限定されており、北西部の山地寄りは表裏縄文系土器群との接触地域になっている。ここでは周辺地域の土器群を室谷洞窟、上信越地域、伊那谷周辺の各地域ごとに検討していくことにする。

1 室谷洞窟上層出土土器群（第15図）

室谷洞窟は周知の通り、第13層—第6層の下層と、第5層以上の上層に分けられ、撫糸文系土器群に対比される土器群は第5、4層を中心にして出土し、関東系の井草式土器は第4層から出土している。

上層土器群は下層土器群と比較して、器形的に大きな違いがみられる。下層土器群は口縁部が隅丸方形で平底を呈し、口縁部に段帯部の口縁部文様帯を作出することを大きな特徴とし、室谷下層式と呼ばれるように型式としての強い画一性を保持している。それに比べ上層土器群は口縁部が円形で丸底かそれに近い尖底を呈するものと思われ（註4）、口縁部が直上するものや緩く外反するもの、強く屈曲するもの等が含まれ、画一性に乏しく時間差を持った土器群の混在した様相を示している。上層土器群は、型式学的におおよそ以下の三段階に区分することが可能である。

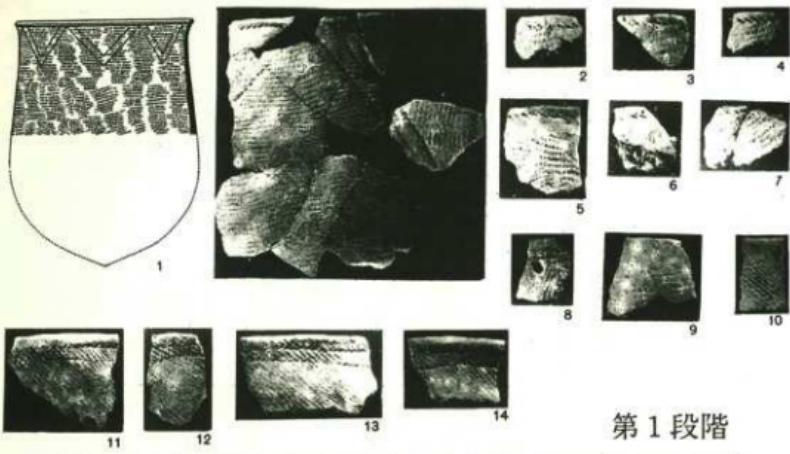
第1段階（1~14）比較的薄手の作りで裏面には指頭による整形痕が明瞭に残る。器形は丸底かそれに近い尖底を呈し、口縁は直上もしくは緩く外反して立つものが多い。口縁部は撫糸による押圧縄文の加飾や、無文部を設ける等、文様帶的な意識が取られる。地文は縄文と撫糸文とがあり、その施文方法にバリエイションがある。1は口唇直下に2段の繩の押圧縄文を1条廻し、それ以下に2本対の押圧縄文を鋸歯状に施文している。地文は全面に横走する縄文を施文しており、この横走縄文は室谷上層土器の代表的な施文テクニックとなっている。2~4は横走縄文上の口唇直下に押圧縄文を施文し、1と同一個体かも知れない。7も同様で地文が斜行縄文である。5、6は口縁部に無文部を持ち、口唇直下に押圧縄文を施文し、地文は横走縄文である。無文部を持ち押圧縄文のないのが9で、地文は横走縄文である。10は直上する口縁部が無文部となり、地文は斜行する撫糸文である。11~14は口縁部に2段の繩の押圧縄文を2本対で施文するもので、口唇部が若干肥厚して外反する。第1段階の土器群の中にあっては、やや後出的な様相であろうか。



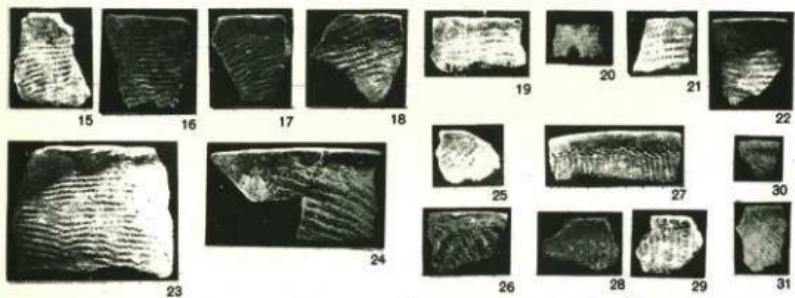
第14図 井草式土器及び周辺の土器群遺跡分布図

- 1.西之城 2.新東京国際空港No7・木の根No6 3.三里塚No51 4.笠木山 5.雨古瀬 6.高根北 7.南西ヶ作 8.樅峯 9.西の台 10.布佐余間戸 11.東寺山石神 12.打越岱 13.苗見作 14.祝町IV 15.下中丸 16.大谷寺 17.青陵 18.烏森 19.東野田 20.吼原 21.西大宮BP No4 22.上尾十二番耕地 23.寺山 24.宮林 25.横立 26.井草 27.多聞寺前 28.多摩ニューノ52 29.多摩ニューノ99 30.多摩ニューノ406 31.小山田No13・No15 32.平根山 33.馬の背山 34.夏島 35.大船山居 36.大楽谷 37.大丸 38.東福寺北 39.代官山 40.仲大地 41.池ノ元 42.大平C 43.若宮 44.石畠 45.三枚原 46.小佐原 47.柄原 48.向山 49.増野川子石 50.桃ノ湖 51.九合 52.室谷

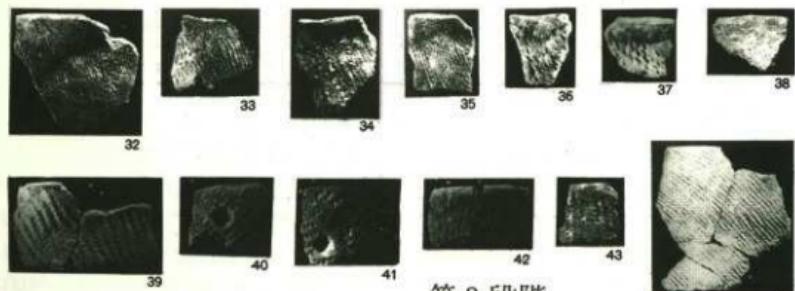
第2段階（15～31）比較的厚手と、薄手の土器とが存在し、裏面の指頭整形圧痕は明瞭に残る。押圧縄文による加飾は殆どなくなり、地文のみの土器群となるが、口縁部に幅狭な無文部を設けるものは残る。器形的には第1段階とほぼ同様であるが、口唇部が強く屈曲するタイプが含まれる。15～23は地文が横走縄文で15～21は口縁部が直上し、22、23は口唇部が屈曲する。また15～17は口縁部に幅狭な無文部を持つものである。24～25は口唇部が屈曲し、斜行縄文が施文される。26は口縁部が直上し、幅狭な無文部が横ナデ状の整形によって作出される。27～29は縦走縄文の土器で、



第1段階

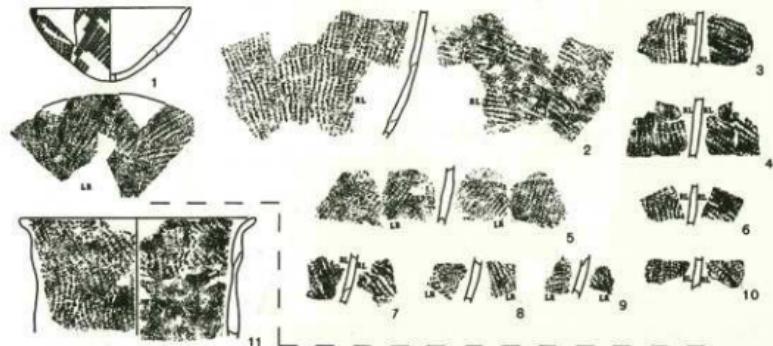


第2段階

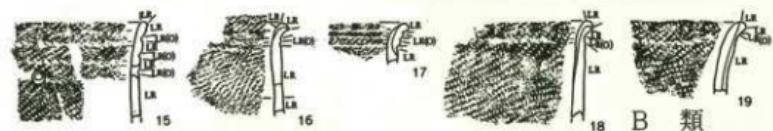


第3段階

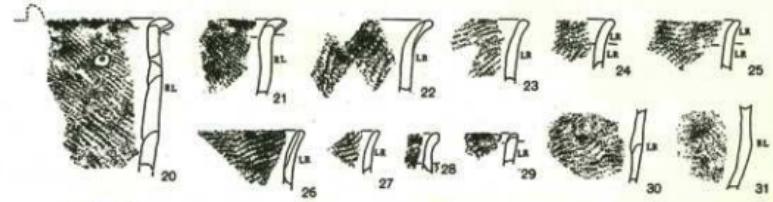
第15図 室谷洞窟上層出土土器



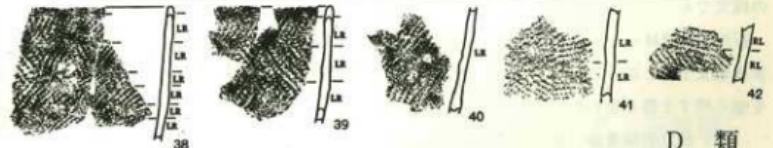
A 類



B 類



C 類



D 類

第16圖 石烟岩陰遺跡出土土器

口縁部は直上する。27は口唇直下に押圧縄文をやや転がす様に施文し、以下に縱走縄文を施している。28には幅狭な無文部が存在する。30、31は撚糸文が施文され、30は口縁部に撚糸原体を押圧縄文状に一度停止して圧痕し、以下斜行する撚糸文を施文している。両者とも口縁部は直上する。

第3段階（32～44）撚糸文土器が量的に増加する段階である。薄手と厚手の土器が存在し、裏面の指頭圧痕も残る。口縁部が大きく屈曲ないし外反するものが多くなり、縄文施文の土器は直上するものが多くなる。32～38、44は撚糸文土器で、32、34は口縁部が強く外反する。36、37は筋のやや大きい撚糸文で、口唇もやや肥厚している。39～41は斜行縄文が施文され、42、43は縱走縄文である。いずれも口縁部は直上する。第3段階の土器群は、関東の撚糸文系土器群の影響を強く受け生成された土器群と思われ、在地系統の土器群のなかに、撚糸文系土器群の要素が垣間見られる。

以上、室谷上層土器群は、撚糸文系土器群に対比できるほどの型式学的な特徴の推移は認められないが、在地系土器群として段階的な変遷を辿ることが可能である。

2 上信越地域の表裏縄文系土器群

（1）石畳岩陰遺跡（第16図）

石畳岩陰遺跡からは表裏縄文土器と表縄文土器、押圧縄文土器、羽状縄文土器等が出土している。土器群は層位的な出土傾向を示しているが、最下層である第14層出土の土器は量が少なく実態が不明瞭であり、現時点では第13層や第27、28層の土器群と明瞭な差異はないものと判断される。

A類（1～14）表裏縄文土器である。第1、2、5、9類とされたもので、1～10が第14層から出土している。11のように口縁部が強く屈曲するものと、12～14のように強く外反するものがあり、裏面施文が深いものと、口縁裏のみに限定されるもの等が存在する。12にみられる口縁部の突起は特徴的なものである。底部は1の如く丸底を呈するものと思われ、指頭による整形痕が残る。

B類（15～19）第6、7類とされた押圧縄文を持つ土器であり、いずれも2段の撚紐を圧痕している。圧痕は口縁部に3～1本施文され、すべて地文の斜行縄文上に施文されている。口縁部は15、17の様に緩く外反するものと、16、18の様に口唇部が強く外反するものがある。

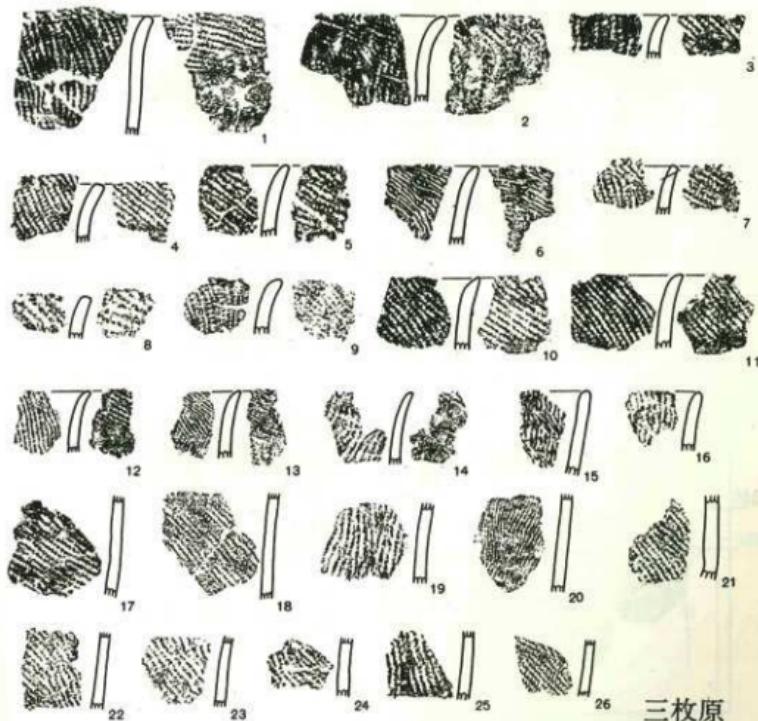
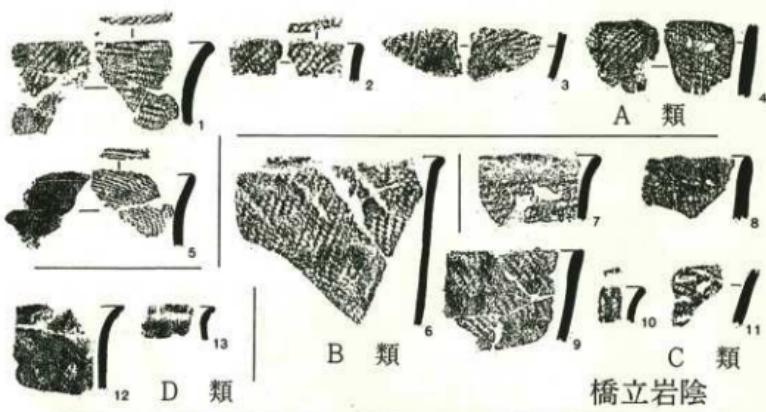
C類（20～37）第3、4類とされた表縄文土器である。20、21の如く口唇部が強く屈曲するものと、23～28の様に緩く外反するものがある。おおかたが斜行縄文であるが、24、25は口縁部に横走縄文を施文し、26は横走に近い縄文である。20の口縁部には突起が存在する。

D類（38,39）第8類とされた羽状縄文土器である。裏面施文はなく、比較的薄手で、指頭による整形痕を明瞭に残す。羽状縄文は同一原体の施文方向を変えて作出されるものであり、38には部分的に細太の原体を撚り合わせて付加条風な効果を表す斜縄文（註5）が施文されており、同じLRの縄文でも、二種類の原体が使用されていた可能性がある。

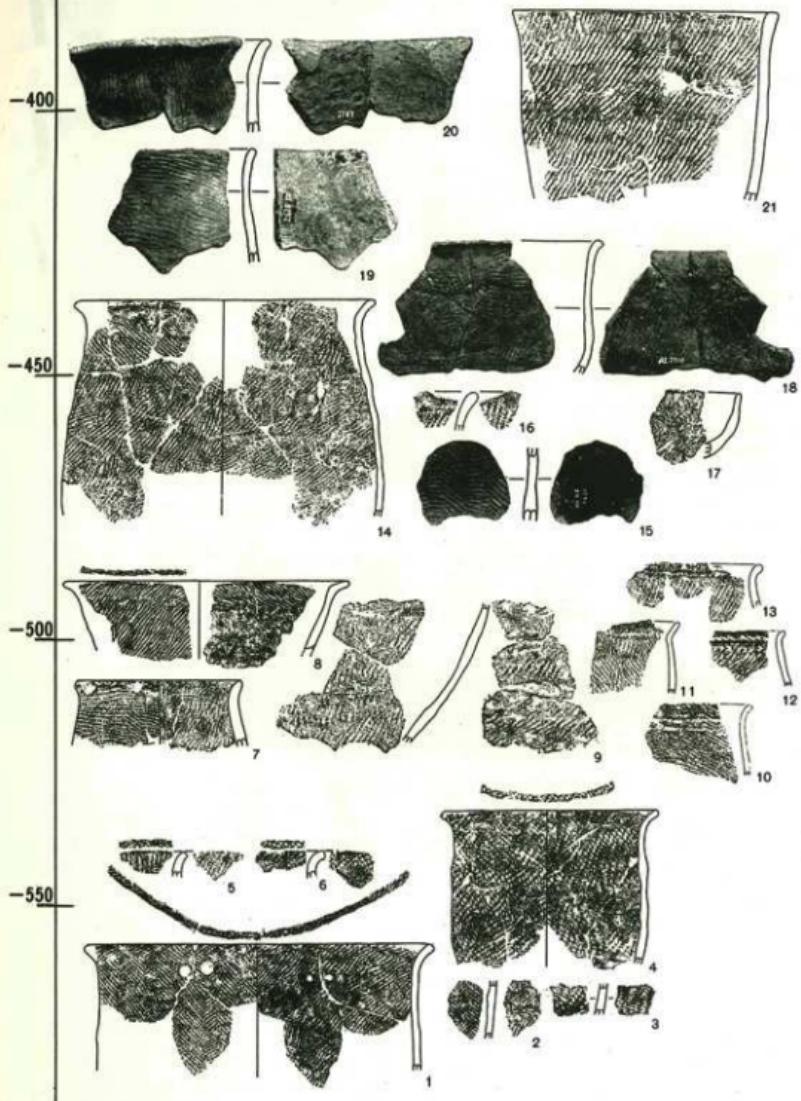
石畳岩陰遺跡の土器群は一見種々雑多な土器群に思われるが、室谷上層土器に類似する土器と、表裏縄文土器とが共存する好資料と言えよう。D類は巾氏も指摘したように室谷下層土器群の系統を強く残す土器と思われ、また、C類のなかには、新しい様相の土器も含まれていよう。

（2）橋立岩陰遺跡（第17図）

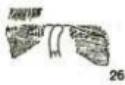
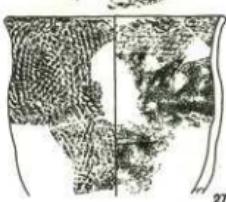
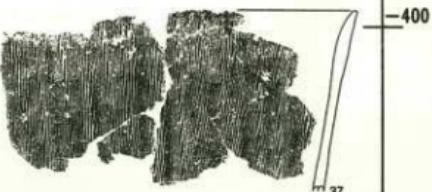
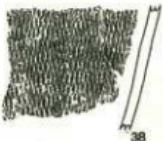
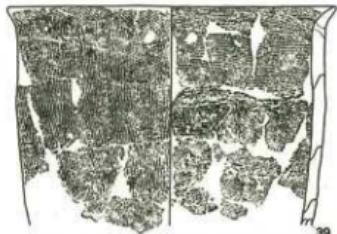
橋立岩陰遺跡は、地理的に撚糸文系土器分布圏とその周辺地域との接觸地点に当たり、表裏縄文



第17図 橋立岩陰遺跡・三枚原遺跡出土土器



第18図 標原洞窟出土土器



土器や表縄文土器、撚糸文系土器及びその影響を強く受けた土器群が混在する。

A類（1～5）表裏縄文及び表裏撚糸文土器である。口縁部は1、5の様に緩く外反するものと、2の如く直上するものとがある。1は表縄文が横走し、2は斜行縄文であり、裏面施文も深いものと浅いものとが存在する。5は表裏撚糸文系土器で、口縁裏には浅く撚糸文が横走する。いずれも器壁がやや厚手のものである。

B類（6）押圧縄文を持つ土器である。口縁部は直上するが、口唇部が強く屈曲する。斜行縄文を全面に施文し、口唇直下に2段の撚糸を右傾させて圧痕する。裏面には指頭による整形痕が残る。

C類（7～11）表縄文土器である。7、8の様に口縁部に無文帯を設けるものや、9、10の様に全面施文のものもある。8、9の口縁部は直上し、7、10は緩く外反する。7の地文は1の如く横走縄文である。器面整形はA、B類と同様に指頭圧痕を残す。

D類（12、13）無文土器であり、口縁部が強く外反するものである。

他には撚糸文土器が多く出土しており、関東の撚糸文系土器群と必ずしも型式学的特徴の一一致をみないが、その影響を強く受けているものとして、後に触ることにする。本遺跡は表裏縄文土器と、撚糸文系土器群及び室谷上層土器群の関係が窺える良好な資料である。

（3）柄原洞窟遺跡（第18図）

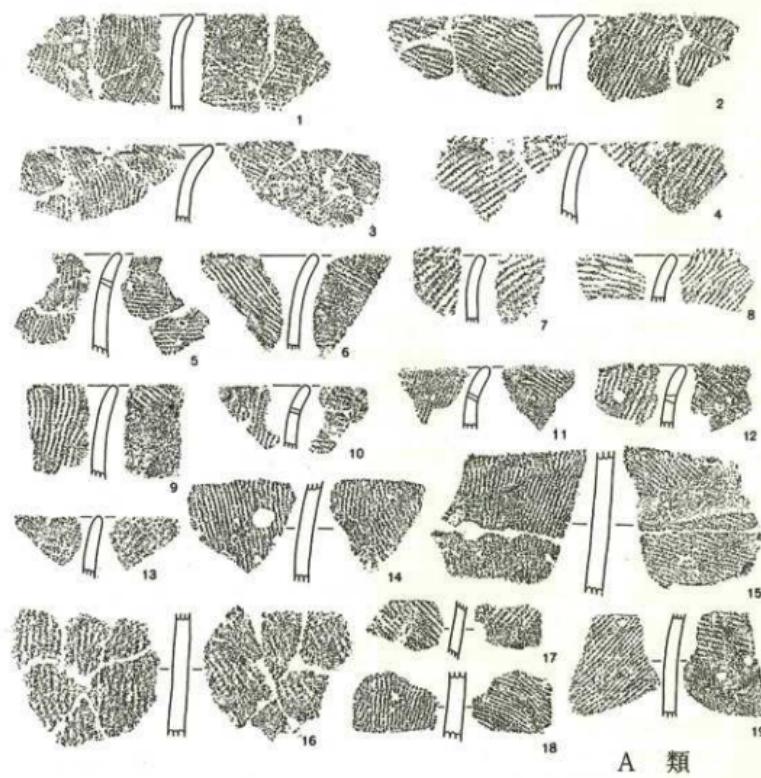
柄原洞窟は信州にあっても秩父山地の裏側に当たり、橋立岩陰遺跡とは地理的に近く、出土土器も類似する傾向にあり、表裏縄文、表裏撚糸文土器、押圧縄文土器、表縄文、表撚糸文土器及び関東の撚糸文系土器群が混在する。第18図は小松慶氏（小松1978）と宮下健司氏（宮下1987）の論文から作図したものであり、層位的出土例ではなく、あくまでも出土深度で並べたものであることをことわっておきたい。出土土器は早期全般に亘るが、撚糸文系土器群と絡む時期のみ図示した。

A類（1～9、14～16、18～20）表裏縄文土器である。 $-5.5\text{m} \sim -4\text{m}$ 位の範囲に出土しており、最深部では表裏縄文土器のみの出土となっている。深度のあるもの程口縁部が屈曲し、薄手の傾向をもち、上部の19、20は口縁部が直上に緩く開く。最深部の1、2は羽状縄文が施文され、裏面の指頭圧痕を明瞭に残す器面上に深い部分まで縄文が施文されている。7、19は地文が横走縄文で、口縁部は緩く外反する。7は比較的厚手で細太原体の撚糸合わせによる付加条風縄文となっている。上部と下部の表裏縄文土器は型式学的偏差が少なく、通時性は認められるものの、型式的区分は難しい。

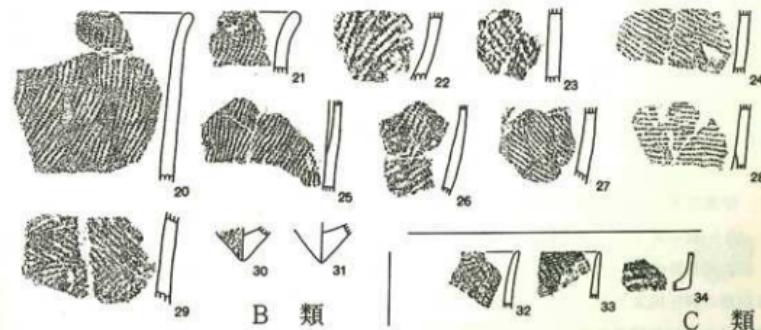
B類（10～13）押圧縄文を持つ土器であり、 -5m 前後で出土している。いずれも口縁部が外反するもので、10は全面施文の上に2本対の押圧縄文が施文され、12は無文部の中に、11、13は無文部との境に施されている。

C類（21）表縄文土器であり、 -4m 位に出土している。他にも表縄文土器は出土しているが、深い部分では実態が不明である。

D類（25～27、35、36、39）表裏撚糸文土器であり、 -5m 位～ -3.5m 位まで出土する。深い部分の25、26は表裏縄文土器と共通する特徴を持ち、25の裏面は縄文が施文される。 -4.5m 前後で交差撚糸文が出現する。18は -3.5m 位で出土しており、口唇部が先細りに屈曲する。表裏面とも丁寧に撚糸文が施文される。この深度では押型文土器が出土する。



A 類



C 類

第19図 小佐原遺跡出土土器

E類(28~33、37、38)表撚糸文土器であり、-4.5m前後を中心にして出土している。30、32、33は口唇部が若干肥厚し、関東の撚糸文系土器的な特徴を示す。30は撚糸文が27と同様に交差施文され、28、29、31、33はやや間隔を開けた関東風となる。上部で出土した38は斜格子目状の撚糸文である。

以上の様に、栃原洞窟では最深部で古手の表裏繩文土器が出土し、押圧縄文を持つ土器がそのやや上部から出土している。また、-4.5m前後が表裏繩文土器と表裏撚糸文土器の混在する段階で、関東系の撚糸文系土器もこの深さから出土している。そして、-4m以上では押縄文土器が出土してくるという図式が看取される。さらに、底部形態は深い程丸く、浅い程尖る傾向にあることを指摘できよう。

(4) 小佐原遺跡 (第19図)

小佐原遺跡は北信に位置し、撚糸文系土器群や表裏繩文系土器群の中心地域とも離れた地域に存在する点に注意したい。表裏繩文土器、表縄文土器、薄手の縄文土器が出土している。

A類(1~19)表裏繩文土器であり、いずれも口縁部は丸頭状を呈し、緩く外反している。地文は縦走縄文が多く、斜行縄文もあり、8は横走縄文である。裏面施文は一見口縁部裏のみの施文の様にみえるが、6では破片下部に縄文があるらしく、15~19の体部破片をみても深くまで施文される可能性のあることがわかる。やや厚手で、全体的に画一性の強い土器群である。

B類(20~31)表縄文土器であり、口唇部形態、外反具合、地文の施文法等、A類と類似する。縦走縄文が目立つ中で、斜行縄文や28の様な横走縄文もある。また、29は羽状縄文風になっている。底部は鋭角な尖底を呈するものと思われる。

C類(32~34)薄手の縄文土器で、口縁部は直上し、平底を呈する。特徴等から広瀬昭弘氏も指摘しているようにA、B類より古式の可能性が高い。

A、B類は類似性が強く、時間的に限定し得る土器群であろう。

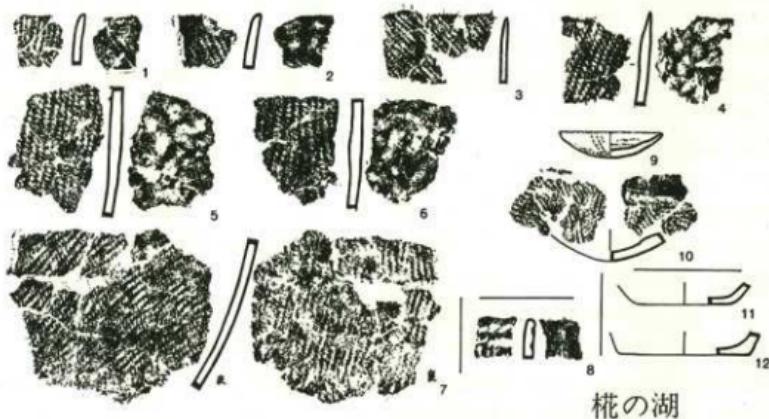
(5) 三枚原遺跡 (第17図1~26)

三枚原遺跡からは表裏繩文土器が少量出土している。報告書では表裏施文の区別がなく判然としないが、口縁部破片はすべて表裏繩文土器である。やや厚手の土器で、裏面に指頭整形痕を残し、口縁部がやや強目に外反するか、弱く外反する。裏面施文は口縁裏に限られるものが多い。口唇部は1、2のような丸頭状と10、11のように内削状を呈するものがある。7、9は細太原体の撚り合わせによる付加条縄文である。三枚原遺跡は小佐原遺跡と地理的に近く、表裏繩文土器も類似する点が多いが、三枚原遺跡の方にやや後出的な様相をもつ土器群が含まれている。

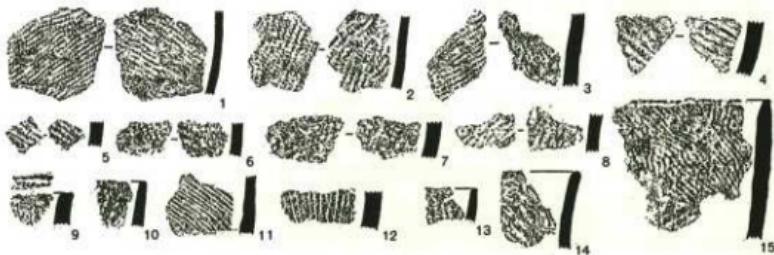
3 伊那谷及びそれ以西の表裏繩文系土器群

(1) 桃の湖遺跡 (第20図1~12)

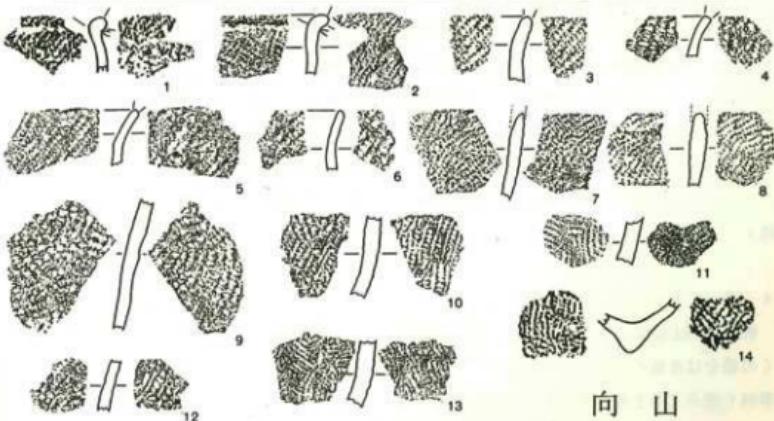
桃の湖遺跡の報文では爪形文土器と表裏繩文土器とが報告されているが、近年の表探資料中には草創期の押圧縄文土器等が含まれており(註6)、表裏繩文土器以前の内容が豊富になっている。表裏繩文土器は口縁部が直上し、丸底を呈するもので、裏面に指頭整形痕を明瞭に残している。裏面施文は部分的なものや接合部に施されるものが多く、部位によっては裏面施文の認められない箇所



桿の湖



九合



向山

第20図 桿の湖遺跡・九合洞窟・向山遺跡出土土器

もある。また、裏面施文の無いものもあり、7のように裏面全面に施文されるものも存在する。8は押圧縄文の土器で、口縁部の無文部に1段の縄を2本対で施文している。また、表探資料中には全面に地文を施文した後、押圧縄文を施すものも存在する。11、12は平底を呈するが、薄手で堅緻な作りの土器で、胎土、焼成等から1~10の表裏縄文土器との違いは一目瞭然であり、押圧縄文を帯状に施文する土器等が表探されていることから、その段階に比定されるものと思われる。

(2) 九合洞窟遺跡（第16図1~15）

九合洞窟からは、少量であるが表裏縄文土器が出土しており、他に表縄文土器も出土している。1~8は表裏縄文土器であり、1、2は薄手で舷の湖遺跡の表裏縄文土器と類似する。3~8は比較的厚手の土器である。9~15が表施文土器で、9~12が燃糸文、13~15は縄文土器である。

(3) 増野川子石遺跡（第21図）

増野川子石遺跡からは、表裏縄文土器、表縄文土器と押型文土器が出土している。表裏縄文土器は口唇部形態にバリエーションがある。

A類（1~8）口縁部が強く屈曲する表裏縄文土器で、1~4のように若干肥厚するものと、5~8のように器壁よりやや薄く屈曲するものとがある。地文は斜行縄文が優勢であるが、7の如く横走縄文も存在する。底部は16の如く丸底に近い尖底を示し、裏面縄文は深くまで施文されるものが多い。

B類（9~15）口縁部が強く外反するもので、口唇部が角頭状を呈するものや、12~15のように先細りのものである。裏面施文は浅いものが多いようである。

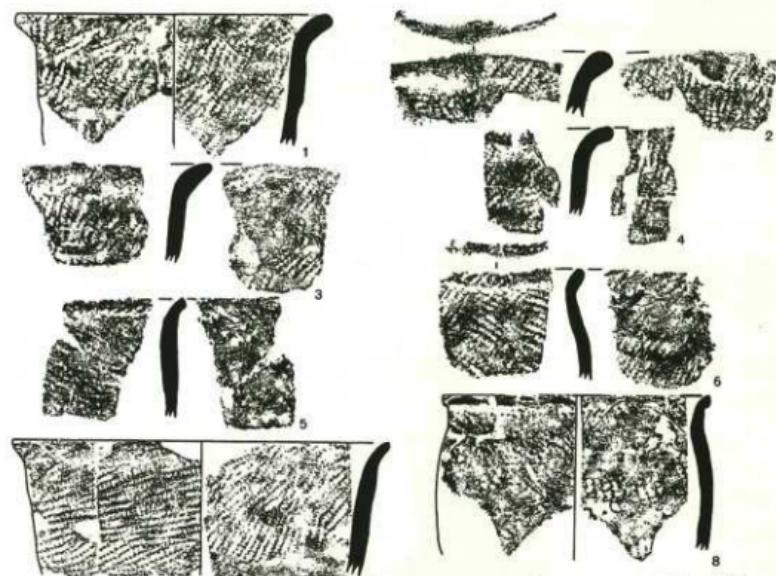
C類（17~22）表縄文土器で、17は口縁部が強く屈曲し、無文となる。18は口唇部が強く屈曲し、19、20、22は角頭状を呈する。22は口唇上に山形の押引文（？）がみられ、明らかに山形押型文土器と関連する段階の土器と思われる。

(4) 向山遺跡（第20図1~14）

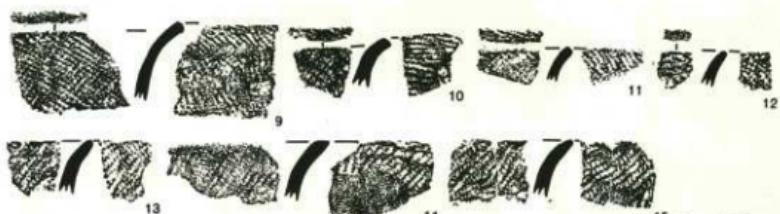
向山遺跡の住居跡からは表裏縄文土器と押型文土器が出土しており、当初伴出關係にある可能性を考えたが（金子1986）遺物を実見するに当たり、時期差のあるものという結論に達した。表裏縄文土器と押型文土器は、土壤の存在する部分及びその周辺でまとめて出土しており、同時性は危ぶまれる。1~14は全て表裏縄文土器であるが、2、14は住居跡出土土器である。1、2は肥厚する口唇部が屈曲し、口唇直下に燃紐の押圧縄文が施される。他は比較的薄手で、口縁部が緩く外反し、7、8は口縁部ではなく、剥落した凝口縁である（註7）。底部は尖底を呈し、裏面にまで地文が施文される。地文は斜行縄文が一般的であるが、10、12は細太原体の燃り合わせによる付加条縄文である。また、11、13は同一原体の施文方向を変えた羽状縄文である。

4 燃糸文系土器群の流入（第22図）

燃糸文系土器群の分布圏外では、真正の燃糸文系土器が出土するのは極めて希なことであり、多くの場合は在地の特性を保持しつつ、要素を類似させているのみに止まっている。また、それらの事例も燃糸文系土器分布圏との接触圏で多く見られる現象であり、遠く北信地域や伊那谷及びそれ以西においては、直接的な影響の要素を識別するのは困難なことである。



A 類

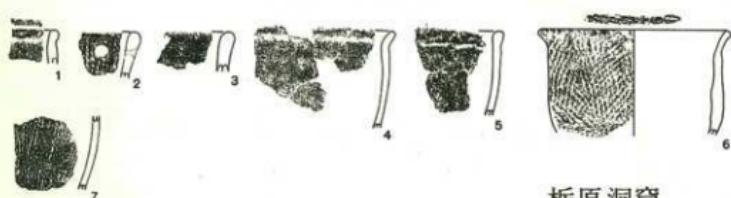
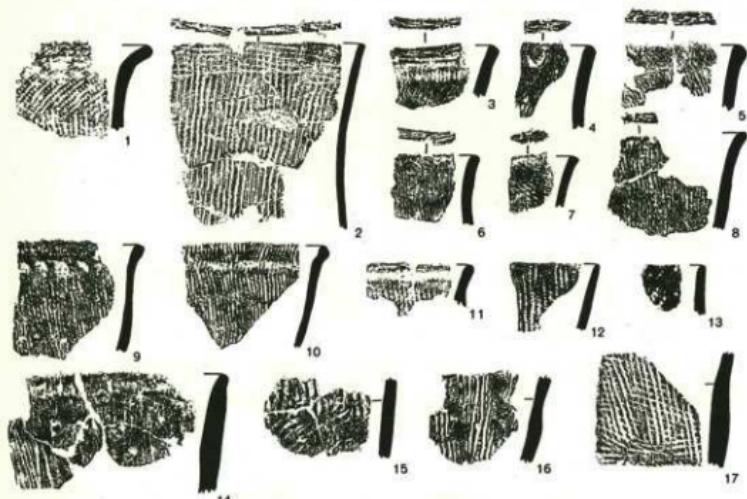
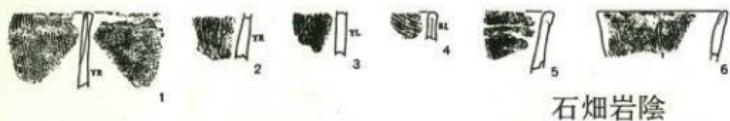
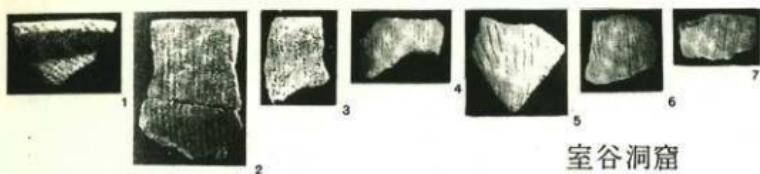


B 類



C 類

第21図 増野川子石遺跡出土土器



第22図 周辺地域の燃糸文系土器群

室谷洞窟では1が井草I式土器であり、胎土、整形、縄文施文手法等から搬入品と思われる。2はその胴部であろう。第4層から出土しており、室谷上層の土器群との有力な伴出関係が知られている。3~7は撚糸文の施文されるものである。3は密接施文で口唇部がやや肥厚するため、夏島式から稻荷台式にかけて、他は稻荷台式に比定されるものと思われる。他に口唇上に撚糸文を施した土器で大丸式に類似するとされたものも存在する。室谷上層で撚糸文施文土器が多くなるのは、稻荷台式の影響を受けたためと考えられる。

石畳岩陰遺跡では確実な資料は無いものの、1~3は稻荷台式に類似する資料であろう。また、5は撚糸文末期の東山タイプの無文土器で、6は器面に擦痕の残る無文土器である。これらは表裏縄文土器より上層で出土しており、これ以降石畳岩陰では関東系の土器群が出土している。

橋立岩陰遺跡は撚糸文系土器分布圏内に位置するため、真正の撚糸文系土器が存在するが、折衷的な土器群も多い。1が井草I式で、3~9が井草II式に比定されよう。また、12は器壁は薄いが縄文の施文法から、夏島式に比定されよう。2、10、14~17は、折衷的な土器群であり、実際撚糸文系土器のどの段階に比定されるか難しい土器群である。

柄原洞窟では、1が井草II式に相当する段階の土器で、2、3、7が稻荷台式、4、5が稻荷台式から稻荷原式にかけての土器と思われる。胎土や土器の顔付きに在地的色彩を帯びるが、基本的な要素は撚糸文系土器群と対比される。また、1、2は-4.5m前後で出土しており、柄原洞窟ではこれらを機に撚糸文土器が増加している。6は稻荷台式の影響を受けた在地の土器であるが、橋立岩陰遺跡の17と類似し、参考までに図示した。

以上の様に、少数事例ではあるが撚糸文系土器群の流入をみると、井草I式段階は非常に影響が少なく、殆どが搬入品という形で出土している。つまり、この段階では各地で在地の土器群が主体となって展開していたことが想定されるのである。次に、井草II式の段階になって、撚糸文系土器群の影響が周辺地域へと波及し撚糸文の井草II式そのものか、または、施文手法や構成法が在地の土器群へと伝播し、更に、稻荷台式の段階で撚糸文系土器群の拡散現象が強まり、在地の土器群と接触、融合して新しいタイプの土器群を生成していることが理解されるのである。

5 周辺地域における土器群の変遷(第23図)

井草式土器周辺の土器群を地域別、遺跡毎に検討を加えてきたが、流入した撚糸文系土器を考慮しながらも、表裏縄文系土器群を中心にしてそれらの全体的な変遷を描いてみたい。

先ず、前項で分類した如く、周辺の土器群には大きく分けて表裏縄文土器、押圧縄文を持つ土器、表縄文土器、撚糸文土器が存在している。各々はセットで、または、単独で出土するが、地域的色彩を強く保持している。上信越以北は遺跡も限定されており比較検討の対象を欠くが、室谷上層出土土器に表縄文土器の変遷の基軸を置き、伊那谷及びそれ以西は表裏縄文土器の型式学的な推移に着目し、上信越地域は両土器群の接触地域として、撚糸文系土器群との比較を考慮しつつ、第1~第4の段階を設定した。

第1段階

草創期の押圧、回転縄文系土器群の系統を強く残存させるが、器形的に口唇部が外反し丸底にな

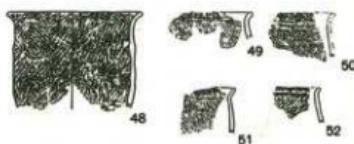
	室谷洞窟上層	上信越
第1段階		
第2段階		
第3段階		
第4段階		

第23図 周辺地域における土器編年図

地 方



47



48

49

50

51

52



53

54



55

56



57

58

59



60

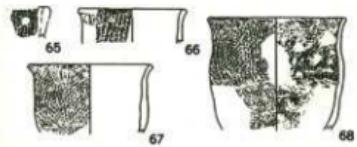
61

62



63

64



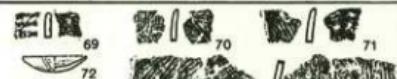
65

66

67

68

伊那谷・それ以西



69

70

71



72

73

74



75

76



77

78

79



80

81



82

83



84

85

86



87

88

89

90



91

92



93

94



95

る等、各地域において新しい土器群が成立する段階である。室谷上層では第1段階に当たり、比較的薄手で指頭圧痕を残す草創期的土器製作法の延長上に、口縁部の文様帶を意識する土器群が成立する。1の押圧繩文による鋸歯状モチーフは草創期伝来の要素であり、2本対で幾何学文を構成する点も草創期的である。2、4、5は口縁部に無文部を設けており、口縁部文様帶を意識している。6、7の押圧繩文の水平施文は各地に共通する要素を持ち、口端部が丸みを帯びてやや外反し、斜行繩文地文である等、室谷洞窟の中では外来的であり、1と比較して後出的である。これらの土器群は草創期の要素を残すものの、室谷下層土器群で盛行した羽状繩文は殆ど姿を消してしまう。

上信越地域では石畳岩陰遺跡と柄原洞窟最深部出土の土器が相当する。石畳岩陰遺跡の26、27は裏面施文が無く、押圧繩文や羽状繩文が施文される等、室谷洞窟に類似する。29、30は厚手で裏面施文の無い土器である。また、30の押圧繩文は26との融合関係を物語っている。石畳岩陰遺跡の資料は、前段階の大谷寺洞窟出土土器から直接系譜の辿れる土器群であり、草創期の要素を多分に残存している。柄原洞窟では最深部出土の47の表裏繩文土器に羽状繩文がみられ、薄手で指頭圧痕整形のみられる口縁部は屈曲する。48の器形は石畳岩陰の28と、また、49~52の押圧繩文の土器は室谷洞窟の6、7と酷似する。52は口縁の無文部内に押圧繩文を施し、室谷洞窟の2と共通する手法である。このように、上信越地域は室谷上層の要素と表裏繩文土器の要素の折衷状況が看取される。

伊那谷及びそれ以西の地域では桃の湖遺跡が代表される。薄手で指頭圧痕を明瞭に残し、72、73の丸底を呈する器形は、70、71のように口縁部が直上気味に緩く外反する口縁部を持つ。また、69は押圧繩文を2条施すが、他に室谷洞窟の3に類似する地文繩文上に押圧繩文を施文する土器が存在する。石畳岩陰24、25と72、74は酷似すると共に、前段階からの器形的な変革が図られた点で共通する。また、増野川子石遺跡の75は口縁部が肥厚屈曲し、28、48、77は29との類似が指摘されよう。更に、76が羽状繩文を施文し口縁部が屈曲する点で、47との類縁性が指摘される。

以上、第1段階は裏面の指頭圧痕を残す整形手法や押圧繩文、羽状繩文等の施文手法に、草創期室谷下層式土器群の伝統を強く残しているが、口唇部が外反し丸底になる器形的変革の下に、各地域において新たな土器群が出現した結果、地域差が顕在化していく段階とさえられる。

第2段階

室谷下層土器群の伝統が弱まる段階で、押圧繩文や羽状繩文手法等が衰退する段階である。全体的に土器群は厚味を帯びるが、指頭整形痕は残り、口縁部が屈曲または外反する等、齊一的傾向の強くなる段階である。

室谷上層では第2段階に当たり、口縁部の屈曲するものが多くなる。10は横走繩文で1の系統を引き、この段階では関東地方にまで流行する繩文施文手法である。室谷上層では口唇部の肥厚化は弱く、屈曲するものを主とするが、13のように肥厚させ押圧繩文状に施文する土器もある。他に、薄手で前段階から続く従来的な土器群も少量存在する。

上信越地域は橋立岩陰遺跡でこの段階の良好な資料が出土している。押圧繩文の33は1本施文の右傾圧痕で、この手法は井草I式の中にもみられる手法であり、1の系譜の退化形態と考えられる。34と36は横走繩文を施文するもので、34が口縁部に無文部を設け裏面施文のない室谷上層的な土器であるのに対し、36は口縁部が外反する表裏繩文土器である。この傾向は柄原洞窟の55にもみられ、

横走縄文は細太の撚り合わせによる付加条風縄文である。小佐原遺跡57の器形は33と良く類似しており、59は横走縄文が施文されている。53、54の表裏縄文土器は口縁部の屈曲が弱く、地域的に比較資料が少ないので、現時点では地域的な様相として捉えておきたい。

伊那谷及びそれ以西の地域の増野川子石遺跡では、口唇が肥厚し突起の付く80がこの段階に相当すると思われるが、この突起は29や31の系譜下にあるものと想定され、井草I式の中にも同様な突起が存在する。また、埼玉県の宮林遺跡でも薄手の表裏縄文土器に、この種の突起が付いている。82は10、55と同様横走縄文の施文されるもので、口唇部は75より薄く先細り状となり、退化的であると同時に室谷上層的であるとも言える。向山遺跡の81は76と類似するものの、80と同様に口唇が丸く肥厚する傾向がある。

以上の様に、第2段階は室谷下層式土器群の伝統がいっそう弱まり、表裏縄文土器を主体とする土器群が確立した段階といえよう。また、齊一性が高まったとはいえ、まだまだ地域的特色を持つ土器群も作られている。

第3段階

撚糸施文土器が増え始める段階であり、口唇上の施文も顕著となり、口縁部形態に変化のみられた段階である。室谷上層では第3段階とした段階で、その中でもやや古い要素を持った土器群を抽出した段階である。16は口唇上に施文のある土器とされており、17は口縁部が屈曲し細密な撚糸文が施文されるものである。上信越地域では橋立岩陰から、41、42の様に型式学的には井草II式に近いものの、在地的要素を併せ持つ土器が出土している。同様な傾向は60の柄原洞窟例や、87の九合洞窟例にもみられる。表縄文土器や表裏縄文土器では、この段階への型式学的推移を把握し難い。上信越地域の三枚原遺跡出土土器をこの段階に位置付けたのは、小佐原遺跡との比較の上である。上信越地域では比較的口唇部の屈曲が弱くなる傾向にあり、これは撚糸文系土器群の影響を受けているためと思われる。伊那谷及びそれ以西では、口唇部が角頭状を呈し、外反する傾向が強くなる。当地方における撚糸文系土器の影響は殆どなく、表裏縄文土器の中でこの段階を識別するのは非常に難しい。増野川子石遺跡の88や91、向山遺跡の90等は器形の変化を遂げている例として、この段階に位置付けられよう。

第4段階

撚糸施文土器が増加し各地域で独自な土器として展開される段階である。室谷上層では、第3段階の新しい様相を持った土器群が相当する。19、20は間隔を開けた粗い撚糸文が施文されるが、口唇部は屈曲し、在地的な様相を残している。21は在地的な斜行縄文土器で、口縁部がやや肥厚して縱走縄文を施文する22は、撚糸文系土器群の影響を強く受けているものと思われる。上信越地域の柄原洞窟では、撚糸施文土器に關東の稻荷台式そのものや強く影響を受けた要素がみられ、表裏糸文までも68の様に変容した土器が生成されている。この交差する撚糸文は、橋立岩陰の46にもみられ、強い共通性を感じられる。また、伊那谷及びそれ以西では表裏縄文土器の終末状況は判然としないものの、93、94の如く口唇が角頭状を呈し、外傾もしくは外反する土器群になるものと思われる。増野川子石遺跡の95は同様な傾向を持つ口唇上に、山形の押し引き文（？）が施文されており、明らかに山形押型文との接触を具現化する資料である。95がこの段階に含まれるかは疑問であ

るが、いずれにしても、表裏縄文土器群の延長線上に押型文土器が見え隠れしており、第4段階以降には押型文土器が出現しているものと考えられる（註8）。

以上、撫糸文系土器群分布圏外の周辺の土器群は、各地域において変遷過程が窺われ、第3～4段階で撫糸文系土器群との接触を強く持つことになる。従って、それ以前の土器群も撫糸文系土器群と対応する形で、在地の土器として変遷していたものと評価することができる。おおよそ、第1～第2段階は井草I式、第3段階は井草II式、第4段階は夏島式以降に対比できよう。

V 井草式直前段階の土器群の検討

前章では井草式土器と対峙する表裏縄文土器を中心とした周辺の土器群を検討し、井草式土器及びこれ等周辺の土器群がほぼ時を同じくして、早期的な丸底の土器群として成立し、展開していることを確認した。ここでは、井草式土器及び周辺土器群の成立過程を探るため、井草式直前段階の土器群を抽出し検討したいと思う。

（1）室谷洞窟下層出土土器（第24図）

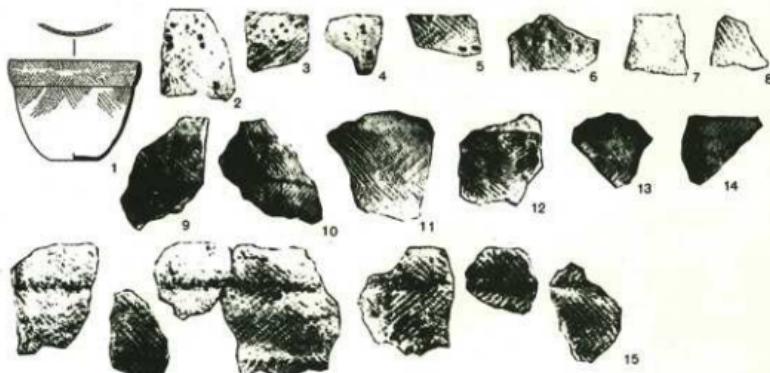
室谷洞窟の下層は層位の把握に若干の相違があるものの、学史的に11～13層の下層、10～9層の中層、8～6層の上層に区分されているが（中村1964、小林1968、佐藤1971）、上層とされる6～8層出土土器には、それ以下の土器群に顯著であった押圧手法の衰退がみられ、段帶部も目立たなくなり、羽状縄文も崩れる等、下層から上層へ向かって裝飾性の薄れた土器群へと推移している。しかし、総体的には様式的画一性を保持し、平底、隅丸方形の口縁を呈し、口縁部が段帶部によって強調されるのを「型式表象」として認識することができる。6～8層として提示された土器は少量で実態の不明なものであるが、1の崩れた羽状縄文、9、10、15の段帶部作出法の衰退等、退化傾向が窺われる。2～5は2本対の工具の刺突文で、口縁部に鋸歯状文を描出する土器であり、室谷上層土器の鋸歯状山形文への脈絡が看取される。また、11の如く「正反の合」による羽状縄文も存在し、室谷下層式としての系統性が保持されている。表裏縄文土器は12～13層で検出されている他に、9層で裏面の接合部のみに施文する表裏縄文土器（註9）が出土している。

以上の様に、室谷下層式土器の主体は中層以下に存在するが、6～8層と9層の一部を含めたものが、室谷下層式土器の中でも新しい部分として把握でき、井草式直前段階の土器群として認識される。

（2）大谷寺洞窟出土土器（第25～27図）

大谷寺洞窟における該期の土器群は、大谷寺III式と呼ばれるものであり、表縄文土器がIII a式、表裏縄文土器がIII b式と分類されている（註10）。大谷寺III式は山内氏により井草式直前段階に位置付けられた。

第25～27図は大谷寺III式とされた土器の一部である。第25図が表縄文、第26、27図が表裏縄文土器である。両者の器形は、口縁部に角頭状と先細り状を呈するものがあり、大部分が内彎ぎみに立ち、平底を呈して、共通する器形になるものと思われる。口縁は第25図5、第26図3が隅丸方形を呈し、第25図1が直線的な口縁部であることから、角頭状で内彎気味のものは隅丸方形を呈するものと思われる。また、先細りで立つ口縁は、隅丸方形に近い円形を呈するものと思われる。いずれ

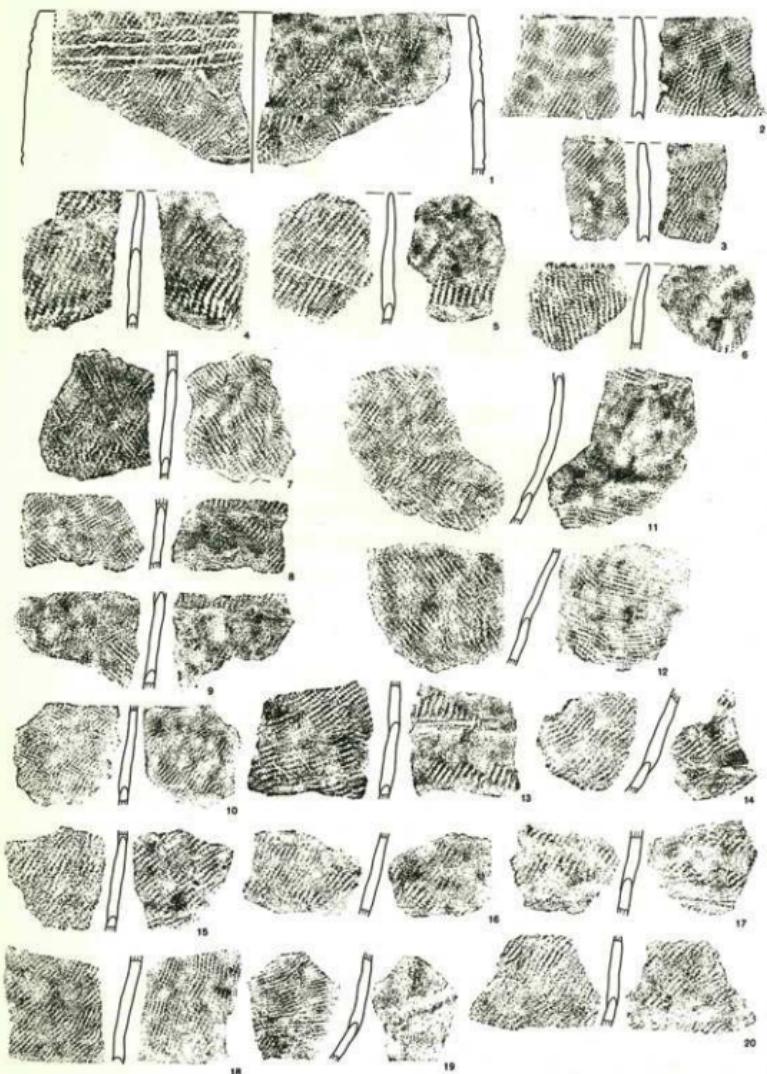


第24図 宝谷洞窟下層出土土器

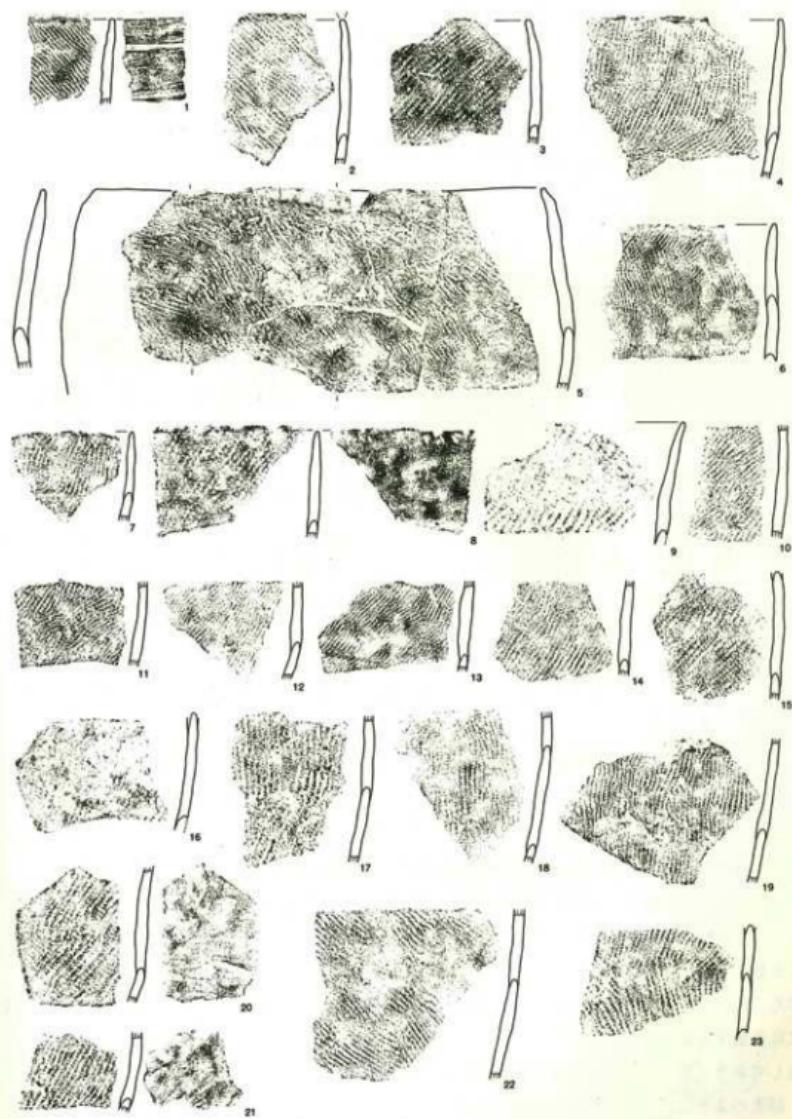
にしても、胴下半部の破片では接合部で屈曲し器形の変わる破片が多く、底部は平底になる可能性が高い。そして、第25図9、第26図6は先細り状の口縁が若干開き、口縁が円形で、小さい平底か丸底の器形になる可能性もある。先細り状の口縁は指頭で摘み上げて整形するものであり、第25図4はその口唇部を削り取って角頭状に作り出している。同図5は丸頭状口唇を部分的に削り取って先細り状に整形している。また、同図8は整形時の爪跡が裏面に残っている。器壁は薄い部分で5ミリ前後、厚い部分で7ミリ前後を測り、接合部分が最も厚くなっている。全体的な器面整形は指頭圧痕をよく残し第25図1は強いナデ整形が施されている。

装飾的な土器は少なく、第26図1は地文繩文上に押圧繩文を口縁部に4本、胴部に3本施し、裏面繩文は粗く全体的に施されている。繩文で装饰的効果を表すものとして「正反の合」による羽状繩文土器が存在するが、図示し得なかった。また、第25図11のように細太の原体を撚り合わせた付加条風繩文や、羽状繩文、同図5の異節繩文もある。羽状繩文は同図6のように施文方向を変えて作出されるものや、第26図10、11のように撚りの異なる原体を帯状に施文して作出するものがある。第26図7～9は不明瞭であるが施文方向を変えた羽状繩文の可能性が高い。裏面施文は全面的に施文するものや、接合部のみに施文するものとがあり、一様ではない。第27図13の平底底部の内面には、繩文が施文されている。

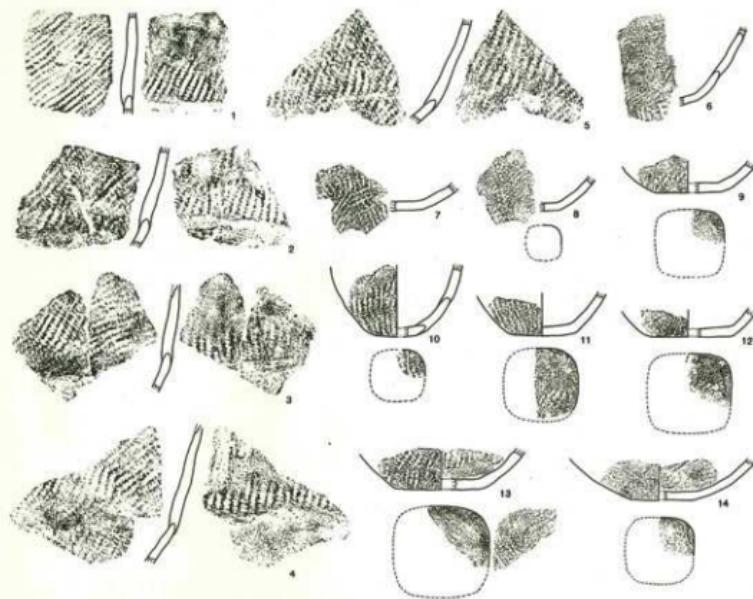
以上のように、大谷寺Ⅲ式は表繩文、表裏繩文ともに型式学的特徴が類似し、若干後出的な様相を持つ土器が両者に含まれるが、纏まりある一群として把握されよう。大谷寺Ⅲ式は回転繩文が卓越して押圧手法が衰退するとともに、「正反の合」の羽状繩文を持ち、回転方向を変える羽状繩文が存在する等、口縁部の段帶部を持たないが、室谷下層の6～8層に相当する好資料であることが理解される。また、第21図5は纖維を含むことが特筆され(註11)、クロスチェックする際の指標となり得る資料であろう。



第25図 大谷寺洞窟出土土器(1) S=1/3



第26図 大谷寺洞窟出土土器(2) S=1/3



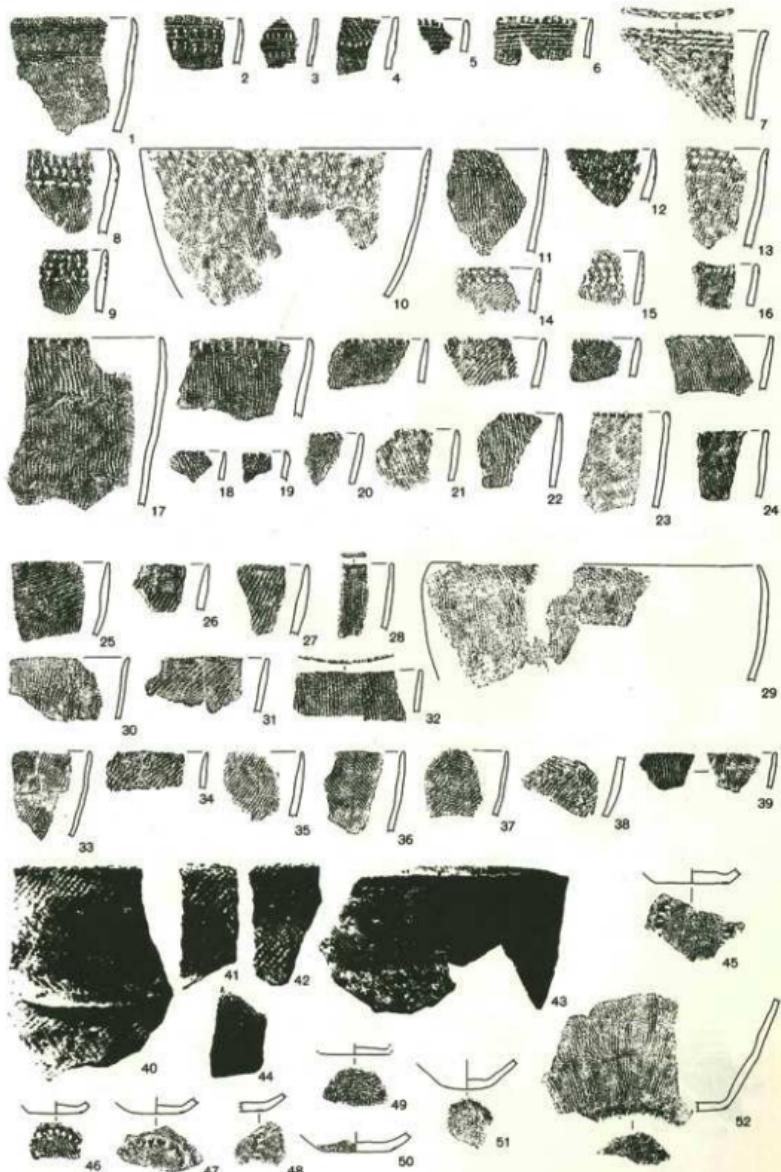
第27図 大谷寺洞窟出土土器(3) S=1/3

(3) 鳥浜貝塚出土土器 (第28図)

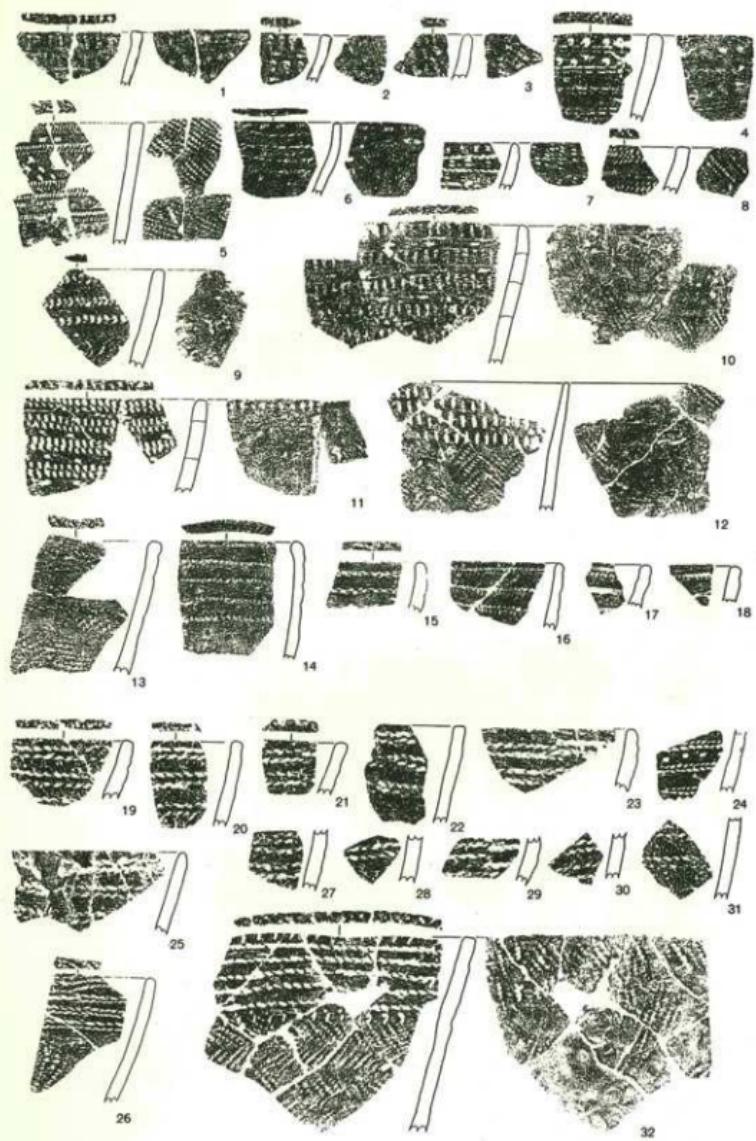
鳥浜貝塚の多縄文系土器群には、押圧縄文を主とした古段階と回転縄文を主とした室谷下層式に相当する新段階が層位的に確認されており、後者には段帯部を持つ室谷下層式や、押圧縄文、刺突文を多用する土器群、回転縄文のみの土器群が併出している。

鳥浜貝塚出土土器は丸味を帯びた角頭状か、先細り状に尖る口縁部が内彎状に立ち上がり、平底を呈するのが特徴的である。地文の縄文上に押圧縄文の卓越する1~24は大谷寺洞窟出土の第26図1と施文手法的に類縁関係にあるが若干古相を帯び、25~43は大谷寺Ⅲ式に近い要素を持つ(註12)。また、「正反の合」の縄や40~42の帯状の羽状縄文、37の交差する羽状縄文等はいずれも大谷寺Ⅲ式に共通する要素でもある。そして、鳥浜貝塚でも草創期段階の表裏縄文土器が希薄ではあるが存在しており、若干の出土例を持つ室谷洞窟と類似している。

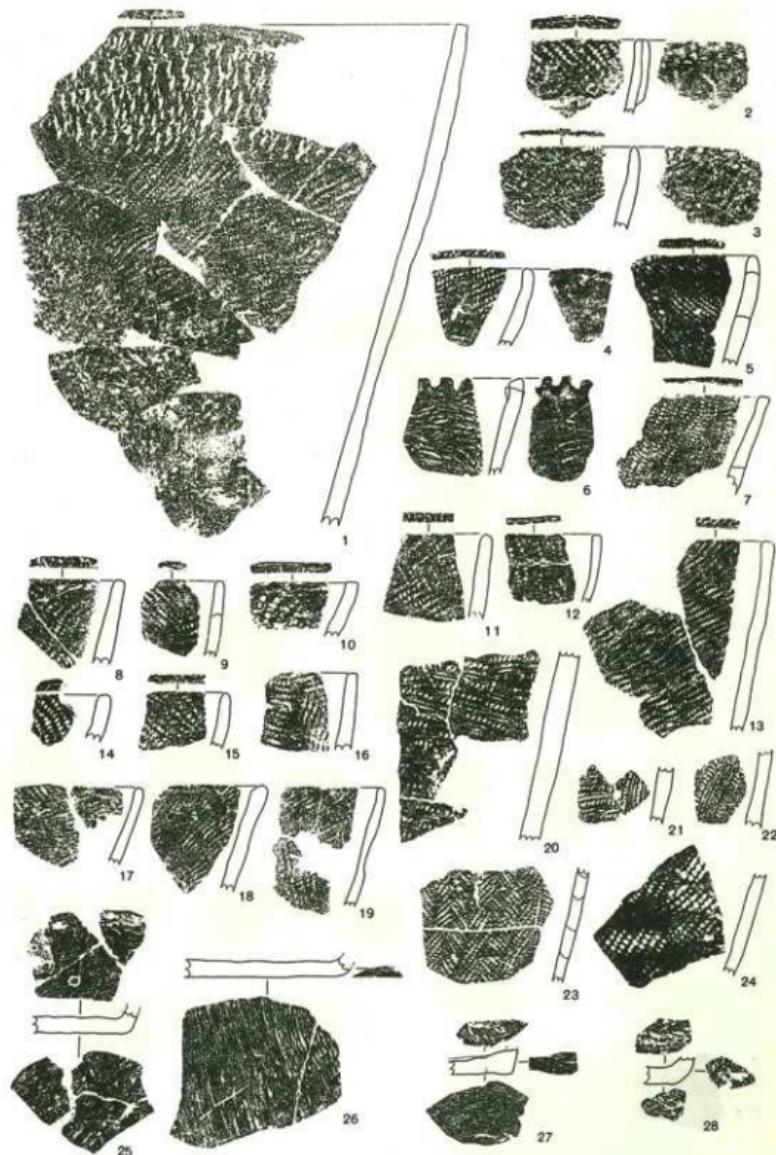
以上のように、鳥浜貝塚出土新期の多縄文系土器は総体的には型式学的に大谷寺Ⅲ式と類似する部分が多く、若干古相を帯び、表裏縄文土器を客観的に持つ点で室谷下層出土土器と類似するとともに、その第6~8層に対応する土器群も含まれている可能性が高い。



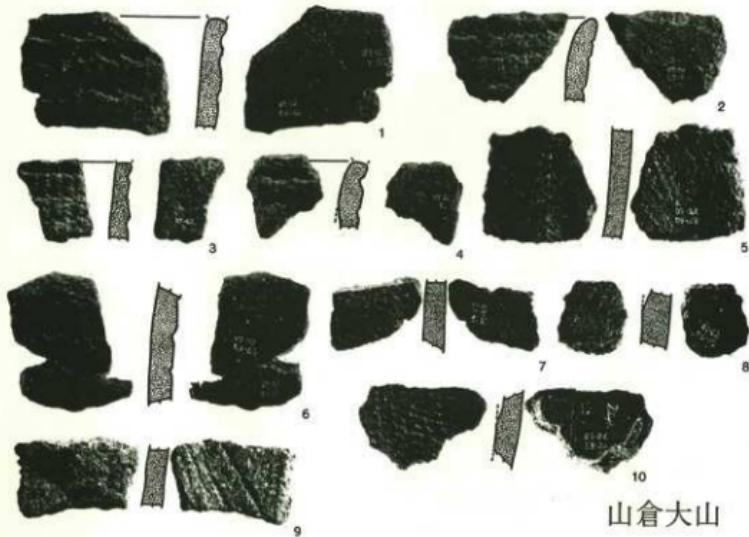
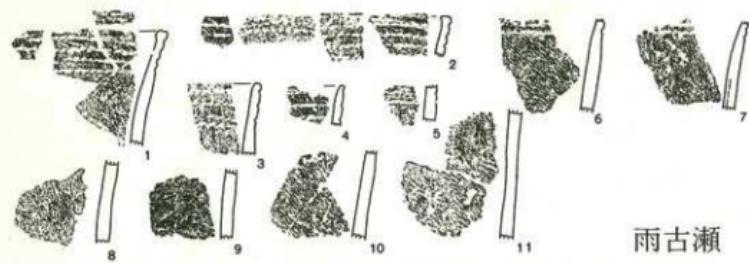
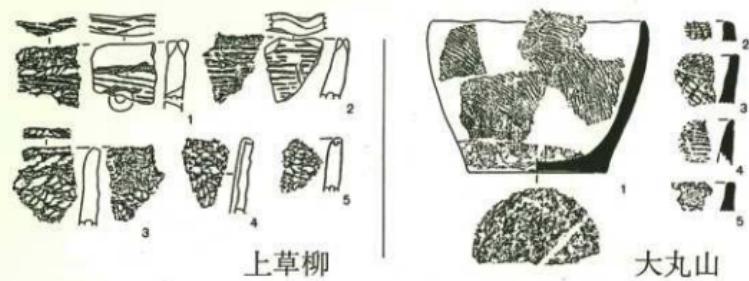
第28図 鳥浜貝塚出土土器



第29図 仲道 A 遺跡出土土器(1)



第30図 仲道A遺跡出土土器(2)



第31図 南関東地方における井草式直前段階の土器群

(4) 仲道A遺跡出土土器 (第29、30図)

仲道A遺跡出土土器群は鳥浜貝塚同様、時間幅を持った土器群が含まれており(註13)、厚手で押圧縄文を多用し、平底であるを基本とする点が室谷洞窟、鳥浜貝塚と同様に地域的な型式表象として認識される。これらの土器群の中で大谷寺Ⅲ式と対比し得る資料は、第29図19~23と第30図である。第29図32は押圧縄文と羽状縄文と表裏縄文が融合した土器であり、押圧縄文の施文される部位に地文縄文を施文しないのは、地域性を顕現しているものと思われる。この土器と最も類似する土器は大谷寺洞窟出土第26図1であり、大谷寺洞窟にみられる各要素が集約されている。19~26の燃りの異なる原体を合わせて圧痕する手法は、多縄文系土器群伝來の要素であるが、新東京国際空港No.7遺跡出土の井草I式土器では区画要素として継承されている。他に、口縁部に段帯部を作出するものや多様な縄文が存在しており、縄文のみのもの、羽状縄文、「正反の合」、「正反の合」に類似させたもの等、室谷下層式、大谷寺Ⅲ式に近いものも含まれている。

(5) 南関東地方における井草式直前段階の土器群 (第31図)

関東地方において井草I式が主体的分布圏となる南関東では、井草I式直前段階の土器群は稀少であり、井草式の最古段階が出土する下総台地では、山倉大山遺跡、雨古瀬遺跡等から出土している。

山倉大山遺跡例は、底部がなく器形は不明であるが、やや厚手で口縁部に押圧縄文の施文される土器で、僅かではあるが裏面に縄文の施文される土器も出土している。雨古瀬遺跡例は口縁部が先細り状の角頭状を呈し直面上にやや開く器形で、指頭圧痕が強く残り、地文の燃糸文上に押圧縄文が施されている。同様な資料として、神奈川県上草柳遺跡出土土器も挙げられる。また、埼玉県大丸山遺跡では先細り状の口縁で平底の縄文土器があり、縄文の施文手法に大谷寺Ⅲ式や鳥浜貝塚出土土器に類似した傾向がみられる。やはり、平底という器形は草創期の大きな特徴となろう。

以上井草式直前段階と思われる土器群を検討したが、これらの土器群は地文縄文の発達、押圧縄文、羽状縄文、表裏縄文、「正反の合」の縄文などの文様及び隈丸方形の口縁と平底の器形、指頭圧痕を残す器面整形法などに共通性を持ち、草創期的な土器群として総合的に把握する事が可能である。しかし、室谷下層土器の段帯部、大谷寺Ⅲ式の表裏縄文の卓越、仲道A遺跡の押圧縄文の多用と器壁の厚さ、南関東における燃糸文手法の存在など地域性も既に現れている。

また、これらの土器群の文様や器面整形手法などの要素は、次の井草式土器及び表裏縄文系土器群、室谷上層土器群のなかに、変化を持った形で継承されており、そこに、口縁隈丸方形の平底土器から口縁円形の丸底、尖底土器の成立という土器製作上の大きな変革を持ちながらも、連続性も認められるのである。

VII 井草式土器及び周辺の土器群の成立について

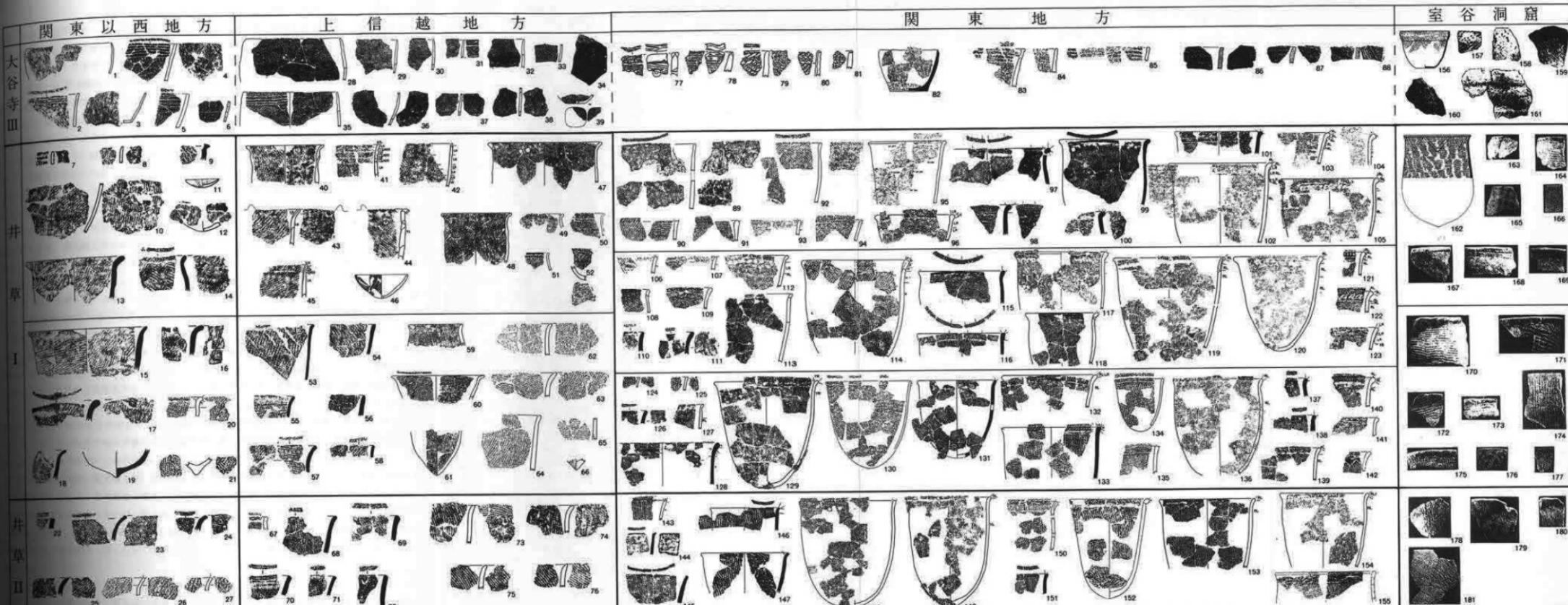
井草式土器及び周辺の土器群とその前段階の土器群の関係を地域毎に編年図として纏めたものが第32図である。ここでは、この編年図を基にして、井草式土器及び周辺の土器群の成立について考えてみる事にする。

井草式土器、表裏縄文系土器群、室谷上層土器群、各々第1段階の土器群の中で、前段階の土器

群から最も型式学的な連続性が認められるのは、上信越地方における大谷寺Ⅲ式から石畠岩陰遺跡への変化である。大谷寺洞窟と石畠岩陰遺跡の土器を比較すると、第32図35の線状押圧縄文の口縁部文様帯は幅をやや狭くして41の土器へ、36、37の横帯の羽状縄文はやや粗い42の土器へ、30、32の斜縄文は43～45の斜縄文の土器へ、35、36、38の表裏縄文手法は40、43の表裏縄文土器へと変化を辿る事ができよう。表裏縄文土器より表裏縄文土器が若干多く占める割合や、押圧縄文による口縁部文様帯を持つ土器を数点含む等、土器群の構成も極めて類似している。文様は型式学的に連続した変化を辿る事が可能であるが、大谷寺Ⅲ式土器は口縁が隅丸方形を呈し口縁部が内傾あるいは直行し、胴部が屈曲して平底の底部にいたる器形を探るのに対して、石畠岩陰遺跡の土器は口縁が円形を呈し口縁部が緩く外反し、胴部が丸みをもって丸底の底部にいたる器形が大部分と思われる。このように大谷寺Ⅲ式土器から石畠岩陰遺跡出土土器への変化には文様の連続性が認められながらも、口縁が隅丸方形で平底の底部から口縁が円形で底部が丸底になるという器形の上で大きな変化が存在している。また、器形の変化に対応して、口縁部は内傾、直行から外反、屈曲するようになる。この器形の変化は、中部、関東地方における大谷寺Ⅲ式段階草創期土器群から井草Ⅰ式段階早期土器群への変化に共通するものであり、その中心は関東地方の井草式土器成立における土器製作法の変革にあると思われる。石畠岩陰遺跡出土土器では、内面に縄文を施文したり、42のように指頭押圧痕を残すなど土器製作上でも大谷寺Ⅲ式からの伝統が強く見られ、器形の変化は井草式土器成立の影響に因るものと考えられる。

中部地方における表裏縄文系土器群についても、石畠岩陰遺跡と同様に文様は大谷寺Ⅲ式土器から連続した変化を捉える事ができる。柄原洞窟の47は異種原体による縦構成の羽状縄文、増野川子石遺跡の14は同一原体の異方向施文による羽状縄文であるが、両手法とも大谷寺Ⅲ式土器に見られる手法であり文様である。また、縦構成の羽状縄文は仲道A遺跡の6にも見られる。柄原洞窟の49～51の線状押圧縄文の土器は、石畠岩陰遺跡41を介して口縁部文様帯が省略化した土器と捉えられよう。8、10、12の柵の湖遺跡、13の増野川子石遺跡、48の柄原洞窟の表裏縄文土器はやや粗い斜縄文が主体であり、これらの遺跡では表裏縄文土器より表裏縄文土器の占める割合が高くなっている。大谷寺Ⅲ式の表裏縄文土器が羽状縄文など装飾性を持っていたのに対して、装飾性が薄れた代わりに表裏縄文手法を発展させて斜縄文を主体とする表裏縄文土器に変化していくと考えられる。このように文様の変化は連続して捉えられるが、器形については石畠岩陰遺跡同様口縁が円形で、口縁部が外反、屈曲し、底部が丸底または尖底の土器へと大きく変化している。

一方、井草式土器第1段階の土器は口縁部文様帯に押圧縄文、羽状縄文、横走縄文、撚糸文など多種の文様を取り入れる特徴が見られ、表裏縄文系土器群が非装飾的であるのに対して極めて装飾的である。中でも押圧縄文と羽状縄文が口縁部文様帯に特に多用されている。91、92、99、101、102の羽状縄文は、いずれもLRとRL2種の原体を組み合わせて作り出したものである。羽状縄文は横構成が多いが、91、99、102では横構成とともに縦構成を組み合わせており、特に新東京国際空港No.7遺跡の102はLR、RL2種の原体を組み合わせた2本の押圧縄文により縦構成を明確に区画している。このような、LR、RL2種の原体により横構成、縦構成の羽状縄文を施文する手法は柄原洞窟の47とも共通し、仲道A遺跡の4、6や、大谷寺遺跡の36、38、室谷洞窟下層の156、



第32回 井草式土器及び周辺の土器群年図

新潟3~3 仲道A4~6 稲の湖8.10~12 増野川子石9.13~19.23~25 向山20.21.26.27 九合22 大谷寺28~39 石畠40~46 桜原47~52.59~61.67 椿立53~58.68~72 小佐原62~66 三牧原73~76 上草柳77~81 大丸山82 雨古瀬83~85.124.125 山倉大山86~88 東福寺北裏89.92
上二番前地90.91 高根北93.106.107 布佐余間戸94 櫻幹95 空港No7 96.102.103.105.112.118~123.127.129.132.136.139.140.149.153.154 木の根No6 104 西之城99 西の台108.109.113.151 多摩ニュー-No52 97.98.100.101.115.116.131.137.138.146.147.151 多摩ニュー-No99
114.133 多摩ニュー-No188 128 山居110.111 宇都宮青陵高校117 多聞寺130.134.135 笠木山141 下中丸142 苗見作143 平根山144 大丸145 小山田No15 150 久原155 室谷156~161

160、161に系統が求められよう。また、102のLR、RL2種の原体を組み合わせた押圧縄文は、それだけで線状の羽状効果を持つ特異な文様であり、仲道A遺跡の5に系統が求められる。

押圧縄文は、LRまたはRLの2段の原体の側面を線状に施文したものが大部分である。多摩ニュータウンNo.52遺跡の101、榎峰遺跡の95はⅡa文様帶に2本の押圧縄文をめぐらしており、新東京国際空港No.7遺跡の102、103、105、木の根No.6遺跡の104は押圧縄文を区画線として施文している。口縁部文様帶に押圧縄文を巡らす手法は、仲道A遺跡の2、4、5、大谷寺遺跡の35、雨古瀬遺跡の83～85、山倉大山遺跡の86、87など前段階の土器群に特徴的に見られるものである。また、押圧縄文により口縁部文様帶を区画する手法は、胴部上半にも押圧縄文が認められる大谷寺遺跡の35に間連が求められるかもしれない。103、104は区画内に2本の押圧縄文により鋸歯状山形文を描いている土器で、室谷洞窟上層の162に類似している。押圧縄文による鋸歯状山形文は前段階には今のところ認められないが、室谷洞窟下層の157、158は刺突文により鋸歯状山形文を描いており、モチーフとしての間連が考えられる。口縁部文様帶を代表とする羽状縄文と押圧縄文の土器の分布をみると、羽状縄文の土器は千葉、埼玉、東京、神奈川の南関東地方全域に見られるが、押圧縄文の土器は千葉県下総台地に集中しており、下総台地では押圧縄文手法を特に積極的に取り入れて文様化していると言えよう。

撚糸文は、多摩ニュータウンNo.52遺跡の98、100で見られるように横走撚糸文と網目状撚糸文がある。100は縄文の上に重ねて網目状撚糸文を施文している。馬の背山遺跡では、第12図1のようにⅡa文様帶に縄文、Ⅱb文様帶に横走撚糸文を施文するなど、口唇部から口縁部文様帶にかけて縄文と撚糸文を組み合わせた文様構成を探っている。前段階の土器では、上草柳遺跡の77、78に斜走撚糸文、雨古瀬遺跡の83～85に斜走撚糸文が見られるだけであり、縄文施文が主流の該期にあって撚糸文はやや特異な関東地方のローカル的な文様とも言える。井草式土器第1段階の撚糸文は多摩ニュータウンNo.52遺跡、馬の背山遺跡など関東地方西部に特徴的な文様であり、井草式土器の成立にあたって関東地方西部を中心に在地的文様としての撚糸文手法が残存したものと考えられる。そして、この関東在地の文様である撚糸文が、第3段階以降、撚糸文系土器群の文様の主流になつていったのではないであろうか。

撚糸文とは対照的に横走縄文は、布佐余間戸遺跡の93、94、新東京国際空港No.7遺跡の105のようく千葉県を中心とする関東地方東部に特徴的な文様であり、特に第2段階で盛行する。前段階の土器に横走縄文は見当らないが、横走撚糸文や押圧縄文を3～4本巡らす口縁部文様帶に文様効果は類似しており、施文手法の置換により新たに作られた文様であろう。また、横走縄文は、162、164、165、170など室谷洞窟上層において顕著な文様であり、室谷洞窟上層と関東地方東部の近い関係が窺われる。

以上のように、井草式土器第1段階の口縁部文様帶は、前段階における各地域の土器の中に文様の系統を求める事ができ、各地域の文様を多様に採り入れて、新たに装飾的な文様帶として確立したものと捉えられる。

口縁部文様帶が前段階の土器から比較的連続的な変化が迫れるのに対して、井草式土器の特徴となってきた口唇部の肥厚、外反とそれに伴う口唇部文様帶の確立は、現在のところ前段階の土器群

との間に大きな差が存在する。口唇部が余り肥厚外反しない東福寺北遺跡の89、92、上尾十二番耕地遺跡の90、91、布佐余間戸遺跡の93、94はいずれも口唇部内面に縄文が施文されている。これらの土器は、石畳岩陰遺跡の43や柄原洞窟の47と同様に前段階の表裏縄文土器の系統を強く残存させた土器と捉えられる。口唇部が肥厚、外反する新東京国際空港No.7遺跡の102、103、105、木の根No.6遺跡の104、西之城遺跡の99、多摩ニュータウンNo.52遺跡の101などの口縁部文様帶は、前述したように、口唇部が肥厚外反せず内面施文を持つ土器以上に前段階の土器の文様が反映されており、前段階の土器から直接的に系統を辿る事ができ、口縁部文様帶の類似性からも両者は同時期と捉えられる。

口唇部の肥厚外反の他に、前段階の土器群と差が大きいものとして器形の変化と内面整形の違いが上げられる。井草式土器は、前段階の口縁が隅丸方形で口唇部が内傾、直行し、底部が平底の器形から、口縁が円形で口唇部が肥厚外反し、底部が丸底、尖底の器形に大きく変化している。内面整形は前段階の土器が指頭押圧痕や整形に関係すると思われる縄文施文を顕著に残しているのに対して、井草式土器の内面整形は、ヘラ状工具等により丁寧に行われ、平滑に仕上げられている。このような器形の変化と内面整形の違いから、前段階の土器群から井草式土器が成立する過程に土器製作法の大きな変革があったことが認められる。口唇部の肥厚外反も土器製作法の変革がもたらした結果と考えられる(註14)。井草式土器は、口縁部文様帶を中心とする文様は、前段階の土器群の文様を各地域から引き継ぎながらも、器形の変化と内面整形に特に見られる土器製作法において新しい手法を確立し、それに伴って口唇部、口縁部、胴部三帯構成の文様帶を確立していった土器と捉えられよう。そして、井草式土器の成立が周辺地域の表裏縄文系土器群や室谷上層土器群に影響を与え、それらの器形の変化をもたらしたものと思われる。井草式土器成立の背景としては、関東地方を舞台とする堅穴住居を中心とする縄文時代最初の定住生活の開始という縄文文化における一大革新事が考えられよう。

VII 収束

Ⅲ～Ⅴ章において、検討して來た結果はおおよそ次のようにまとめられる。

① Ⅲ章では、井草式土器について検討した結果、井草式土器は口縁部文様帶の省略化の方向性を中心にして、型式学的に4段階の変遷を辿る事が把握された。第1段階は、口唇部文様帶、口縁部文様帶、胴部文様帶の構成を探る井草I式土器が関東地方に成立するが、押圧縄文、羽状縄文、表裏縄文など前段階の文様要素が多く用いられ、地域色が強く見られた。第2段階になると、口唇部文様帶に斜縄文、口縁部文様帶に斜縄文、横走縄文、胴部文様帶に縱走縄文の典型的な井草I式J型土器が完成し、関東地方という画一的な地域性が捉えられ、その画一性は第3段階、第4段階にはいっそう強まり、それと平行してJ型土器優勢からY型土器優勢への移行も進行する事が理解された。また、表裏縄文系土器群、室谷上層土器群といった周辺の土器群に類似する土器を少量ではあるが抽出し、井草式土器の変遷の中に組み込む事が出来た。

② 続いてⅣ章では、井草式土器に平行する周辺の土器群として、関東地方北部から中部地方に分布する表裏縄文系土器群と室谷上層土器群を取り上げて検討した。その結果、それらの土器群は

上信越地域、伊那谷周辺といった、ある程度の地域的な纏まりを持ちながら、おおよそ4段階のグループに区分できる事が確認された。第1段階は、表裏縄文土器、表縄文土器の口縁部文様帯に押圧縄文、羽状縄文などの文様が見られたが、第2段階になるとこれらの文様は消失して口唇部に無文部を持ち、斜縄文、横走縄文だけの土器が主体になり、第3段階では縄文が縱走する傾向が見られ、第1、第2段階で特徴的であった口唇部の屈曲が直線的に外反するようになる事が把握された。また、第3段階になると、関東地方に隣接する地域では、井草Ⅱ式Y型土器の影響が波及して撫糸施文の土器が顕著になり、第4段階には撫糸施文の土器はいっそう増加し、各地域において在地的な撫糸施文の土器が作られる状況が見られた。以上のような、第1段階における口縁部文様帯の在り方、第2段階以降の口縁部文様帯の省略化の方向性は、井草式土器の変化の方向と共通するものであり、更に、第3段階、第4段階における撫糸文系土器群との関係から、表裏縄文系土器群と室谷上層土器群を井草式土器及びそれに続く撫糸文系土器群と併行する周辺の土器群として位置づける事が出来た。また、第4段階における撫糸文系土器群の影響による周辺地域の状況の中に、表裏縄文系土器群に続く押型文系土器群の出現の一端を確認する事ができた。

③ V章では、井草式土器及び表裏縄文系土器群、室谷上層土器群の成立過程を探るために、井草式直前段階の土器群を検討した。その結果、関東、中部地方における井草式直前段階には、口縁部に段帯部を持つ室谷下層式6~8層土器、表裏縄文が多い大谷寺Ⅲ式土器、押圧縄文など文様化が顕著な仲道A式の新しい様相の土器、刺突文と縱走縄文の鳥浜I式の一部の土器などの特徴的な土器群が各地域に存在し、これらの土器群は地域色を保ちながらも、口縁部が隅丸方形を呈し、平底の器形を探るという草創期の土器として基本的な共通性を持ち、また、押圧縄文、羽状縄文、「正反の合」の縄文、表裏縄文などの文様や指頭押圧を残す内面整形が共通しており、押圧、回転縄文系土器群最終段階の室谷下層系土器群とも呼称できる土器群として総体的に捉える事ができた。

④ VI章ではⅢ~V章の検討結果から井草式土器及び周辺の土器群の成立について考察した。先ず、石畳岩陰遺跡に代表される表裏縄文系土器群第1段階の土器群は、表裏縄文手法や指頭圧痕を残す内面整形において大谷寺Ⅲ式土器を中心とする草創期土器群から最も連続的に系統を辿る事ができ、草創期の手法を多く継承しながらも表裏縄文手法を多用する土器として関東地方北西部から中部地方にかけて展開したものと捉えた。一方、井草式土器第1段階の土器群は、口縁部文様帯におけるLRとRL2種の原体による押圧縄文、羽状縄文を作る手法は中道A遺跡の土器に、口唇部内面施文は大谷寺Ⅲ式の表裏縄文土器に、鋸歯状山形文は室谷下層土器に、撫糸文の存在は上草柳遺跡、雨古瀬遺跡のような関東地方の特徴的な文様に系統が求められるなど、前段階の土器群の要素を各地域から取り入れている事が判明した。このように、井草式土器及び表裏縄文系土器群は前段階の土器群の文様を多く取り入れた土器であるが、隅丸方形から円形へという口縁形態、平底から丸底、尖底へという底部形態など、器形を中心とする土器製作に大きな変革が存在し、しかも、この変革は、井草式土器の成立において最も顕著であり、表裏縄文系土器群及び室谷上層土器群もほぼ同時期に、井草式土器の成立と関連して変化したと推定された。さらに、系統が求められない井草式土器口唇部の肥厚外反については、草創期の平底土器が口唇部を上にして整形、施文されるのに対して、丸底、尖底の井草式土器は逆位にして整形、施文され口唇部を最後に上にして整形、

施文され仕上げられるといったような土器製作の変化の中に原因を求めてみた。

⑤ 以上の検討結果を踏まえて改めて井草式土器成立の意義を考えると、井草式土器は中部、関東、東北南部地方に展開した草創期押圧・回転縄文系土器群各地域の伝統を取り入れながらも、関東地方において円形の口縁形態、丸底・尖底の底部及び指頭圧痕を消すヘラ状工具等による丁寧な内面整形などの新しい土器製作技法を開発し、かつ、新しい器形に合わせて口唇部、口縁部、胴部三帯の企画性の強い文様構成を持ち、関東地方という地域性が確立した土器として成立したと位置づけられる。関東地方では井草式直前段階の押圧・回転縄文系土器群の遺跡は貧弱な様相を示していたが、井草式土器の成立とともに爆発的に遺跡が増加し、土器製作が活発になり、その結果、周辺地域にまで影響を及ぼしたと考えられる。確かに井草式土器の成立には、器形の変化、口唇部の肥厚外反など前段階の土器群との間にかなりの飛躍があるが、周辺地域において前段階の草創期的手法による土器作りが続けられている状況の中で、真に関東地方において新しい土器作りを始めた事こそが評価されるのではないだろうか。このような井草式土器成立の背景としては、堅穴住居や貝塚の出現が示すような、関東地方という広域な台地と海岸を利用して縄文時代最初の定住生活が始まった文化現象を考える事が出来よう。

縄文土器編年において孤立している井草式土器を解放するため、井草式土器及び周辺の土器群を検討し、中部地方から関東地方北部に分布する表裏縄文系土器群と室谷上層土器群を井草式に対比される土器群として位置づけ、さらに、井草式土器とこれら周辺の土器群の成立についても考察を及ぼしてきた。しかし、該期の資料はまだ乏しくかなり強引に論を進めたため不明な点が多くある事と思われる。第32図は井草式土器及び周辺の土器群の関係を編年図として纏めたものである。今後、関係を示す新資料の出現を期待しながらさらに検討を加え改定していきたい。

謝　　辞

本稿を草するに当たっては、埼玉シンポジウムを通して、白石浩之、土肥孝、宮下健司、大塚達朗のバネラー諸氏、コメントを頂いた小林達雄、村澤正弘、鈴木保彦、戸田哲也、渋谷昌彦、山田昌久、岡本東三の各氏から多くの御教示及び御指摘を頂戴した。また、資料の見学にあたっては、原寛、友野良一、樋口昇一、巾隆之、竹澤謙、塙静夫、広瀬昭弘、矢戸三男、西川博孝、峰村　篤、駒形敏郎、馬飼野行雄、上野晃、網谷克彦、山田猛、松田真一、佐々木洋治、笠原信男の各氏から御教示を頂き、大変御世話になった。ここに銘記してお礼申し上げます。特に塙氏には大谷寺Ⅲ式土器の実測及び資料としての掲載を御快諾頂いた事を改めて御礼申し上げます。また、同じ職場にいる中島宏、細田勝、宮井英一、栗島義明の学兄達とは、資料見学を常に共にし討論を交わしてきた。本稿はこのような共同研究を基礎にして纏めたものである。

なお、本稿は昭和62年度文部省科学研究費B「関東地方縄文早期撫糸文化の研究」及び、当事業団昭和62年度研究助成「撫糸文化の研究」の成果の一部である。

註1 草創期と早期の境を何處に置くかについては、撫糸文系土器を草創期後半とし、押型土器をもっ

て早期とする山内清男案と、撚糸文系土器をもって早期とする小林達雄案がある。両者の違いは、縄文土器編年における撚糸文系土器の研究歴的及び全国的編年における位置づけの相違から来ていると思われる。ところが、現在もなお撚糸文系土器に対比される土器が不明なため全国的編年における位置づけが困難であり、その状況については山田昌久氏がコメント（山田1988）したとおりである。同じ状況は撚糸文系土器を除くと前段階の土器が不明な押型文土器についてもいえ、押型文土器の出現が撚糸文系土器後半に位置づけられる現在では、押型文土器をもって早期とすると中島宏氏が指摘したように（中島1988）撚糸文系土器後半から早期となり都合が悪い。筆者らは、前段階の草創期的手法の平底の土器群から新しい土器製作法をもって丸底、尖底の土器を作成した撚糸文系土器群の成立を大きく評価し、また、その変革が次の押型文土器、沈線文系土器へと連続している事から、撚糸文系土器を早期初頭に位置づけるものである。

註2 表裏施文の土器は、表裏縄文土器と呼ばれ一般的には草創期というイメージが強い。口唇部内面施文の手法は、隆起線文土器、押圧縄文土器にも若干認められる。井草式前段階の室谷下層土器、鳥浜貝塚、中道A遺跡では少ないが、大谷寺遺跡では約半数を占めている。ここでは草創期の表裏縄文土器の系統を引いて井草式土器に平行して周辺地域で表裏縄文手法を展開した土器群を表裏縄文系土器群と捉えた。

註3 千葉県の新東京国際空港地内では、最近No.7遺跡に統いてNo.60遺跡においても井草式土器が纏まつて出土しており、矢戸三男、石橋宏克、峰村 篤氏の御好意により資料を実見する事ができた。No.60遺跡の井草式土器を見ると、口縁部文様帯の横走縄文が特に発達したもの、押圧縄文が色々なモチーフを持つもの、口唇部に突起を持つものなどが多く、No.7遺跡と比較して更にバラエティーに富んでおり、そこに室谷上層土器群等周辺土器群との関連性を強く感じさせた。

註4 室谷洞窟出土土器は、長岡市立科学博物館の駒形敏郎氏の御好意により実見させていただいたが、上層出土土器群の中には確たる底部は検出されておらず、第15図1が丸底であるかどうかは確定できない。しかし、口縁が円形を呈し胴部がやや張る器形は丸底を志向する場合が多く、他の上層出土土器群も表裏縄文系土器と同様な器形を呈するため、これ等の土器群は丸底及び尖底を呈する蓋然性が高い。

註5 戸田哲也氏によても指摘されている（戸田1988）原体であり、草創期末期から早期初頭にかけて見られる原体で、井草式段階では併出する異系統の土器に時より見られる。細い原体と太い原体を2本撚り合わせて二段の縄文を作出するが、施文効果は付加条縄文に類似する。また、この原体は「正反の合」の縄にも近い効果が窺われ、「正反の合」の縄が第2種巻の付加条縄文でも代用されることから、草創期段階に撚り合わせる縄のみでなく、原体に縄を巻き付ける手法も存在していたものと思われ、その巻き付ける手法から撚糸文が発生した可能性も考えられるのである。撚糸文は自縄自巻B種の回転によっても同様の長い圧痕が得られるが、この場合の筋は硬くしまったものとなり、撚糸文の圧痕とは趣を異にする。自縄自巻B種の原体も巻き付けることを基本とする点で、付加条手法と共通する。現に、撚糸文の出自は不明であり「正反の合」の縄が廃れた後に撚糸文が盛行することを考慮すると、付加条手法から撚糸文が発生した可能性も考えられる。

註6 柿の湖遺跡出土土器は、原寛氏の御好意により実見させて頂いた。また、氏が近年遺跡で表採され

た土器群も拝見させて頂き、柾の湖遺跡からは多彩な土器群が出土していることを御教示頂いた。その中には縦位の短縄文を水平に連ねて横帯区画状に施文するものがあり、多縄文系土器群で草創期シンボジウム編年の第Ⅱ期の宮林遺跡段階に相当するものと思われる土器が検出されている。依って、報告書で図示されている平底土器は、この段階の底部である可能性が高い。

註7 向山遺跡出土土器は友野良一氏の御好意により資料を実見させて頂いたが、胴部破片の中には接合部の剥落箇所が明瞭にわかる破片が存在しており、概報で口縁部にされていた7、8にも剥落の痕跡が認められた。表裏縄文土器の成形法は胴部を部分的に製作し、接合して一個体に作り上げるのが多い。

そのため、各部分には全面に縄文が施文されており、それらは接合部に胎土を盛り上げて接合され、重ねて縄文が施文されている。つまり、剥落した接合部の下から縄文の施文されている部分が露出し、恰も口縁状を呈するのである。この成形法は草創期以来の伝統的手法であり、柾の湖遺跡にもみられる。

註8 押型文土器の出現については、その編年が確定していない以上に不明である。関東地方では、井草Ⅱ式以降のY型土器優勢の中心地域になった西部地域において、稻荷台式前後に伴出する山形押形文土器が現在のところ最も古い。中部地方では表裏縄文系土器群の系統が押形文土器出現以降もかなり残存しており、井草Ⅱ式以降の撫糸文系土器群と表裏縄文系土器群の接触の中に押型文土器出現の一因を考え事が可能かもしれない。

註9 12~13層で検出されている表裏縄文土器は報告書に呈示されており、表に羽状縄文や「の」状の側面圧痕文が施文されているものである。9層の表裏縄文土器は1点のみ出土したもので、裏面の接合部が肥厚し、その上に縄文が施文されるもので、大谷寺Ⅲ式の表裏縄文土器の中でも接合部のみ縄文を施文する土器と酷似している。

註10 大谷寺Ⅲ式土器については、塙静夫氏及び大谷寺観音事務所の御好意により実見することができ、さらに、実測及び資料としての掲載についても御快諾を頂いた。

註11 第21図5程ではないが、胎土及び器表面に繊維痕の観察される土器が何点か存在する。大谷寺Ⅲ式の段階で、胎土に繊維を含む土器は仲道A遺跡から出土しており、両者がより類似関係にあることが把握される。

註12 烏浜貝塚1979年の報告では、大谷寺Ⅲ式に近いとした土器群はE類に分類されており、側面圧痕文や刺突文の施される土器群よりも新しくなる可能性が示唆されている。また、刺突文列による疑似側面圧痕文はC類とされており、E類より古く位置付けられているが、角頭状の口唇部がやや外反し、他の土器群とは若干様相を異にしている。E類は縄文のみ施文されるものであり、この新しいとされる段階に装飾的な土器が皆無であることも考え難く、疑似側面圧痕文土器を伴うことが考えられる。

註13 仲道A遺跡出土土器については、埼玉シンボジウムの渋谷昌彦氏のコメントとそれに対する土肥孝氏のリコメントにおいて、その細分の必要性と編年的位置づけが示されている。

註14 土器製作における整形や施文の順位が判る資料は少ないが、多摩ニュータウンNo52遺跡における小林氏の詳細な観察によると、井草Ⅰ式土器の文様帯施文順位が、胴部→口縁部→口唇部と口唇部が最後になる土器が多い。丸底・尖底の井草式土器は、逆位にして整形、施文し、最後に口唇部を上にして仕上げるといった土器製作法が考えられるかもしれない。

参考引用文献

- 白崎高保 1941 「東京稻荷台先史遺跡－稻荷台式系土器の研究（一）」古代文化第12卷第8号
- 矢島清作 1942 「東京市杉並区井草の石器時代遺跡－井草式土器について－」古代文化第13卷第9号
- 芹沢長介 1954 「関東及び中部地方における無土器文化の終末と縄文文化の発生とに関する予察」駿台史学3号
- 芹沢長介他 1955 「千葉県西之城貝塚－関東縄文式早期文化の研究－」石器時代第2号
- 芹沢長介 1957 「神奈川県大丸遺跡の研究」駿台史学7号
- 杉原莊介・芹沢長介 1957 「神奈川県夏島における縄文早期初頭の貝塚」明治大学文学部研究報告考古学第2冊
- 岡本勇 1959 「三浦郡葉山町馬の背山遺跡」横須賀市博物館研究報告第3号
- 栗原文藏・小林達雄 1961 「埼玉県西谷遺跡出土の土器群とその縄年の位置」考古学雑誌第47卷第2号
- 小林達雄 1962 「無土器文化から縄文文化の確立まで」上代文化別冊
- 原 寛・紅村弘 1958 「岐阜県恵ノ湖遺跡略報」石器時代第5号
- 中村孝三郎 1964 「室谷洞窟」長岡市立科学博物館研究調査報告第6号
- 西村正衛 1965 「千葉県香取郡神崎町西ノ城遺跡－第二次発掘略報－」古代第45・46合併号
- 原信之 1966 「燃糸文化の展開に関する試論」金鉢19
- 原信之 1967 「鎌倉市大船山居遺跡発掘調査報告」鎌倉市文化財資料第6集
- 澄田正一・安達厚三 1967 「九合洞窟」日本の洞窟遺跡
- 芹沢長介他 1967 「埼玉県橋立岩陰遺跡」石器時代第8号
- 小林達雄 1967 「第4章 縄文早期前半に関する問題」多摩ニュータウン遺跡調査報告Ⅱ
- 小林達雄 1968 「室谷第一群土器に関する覚書」歴史教育第16卷第4号
- 可見通宏 1968 「No.99遺跡－縄文早期前半の土器－」多摩ニュータウン遺跡調査報告V
- 可見通宏 1968 「No.188遺跡－縄文早期前半の土器－」多摩ニュータウン遺跡調査報告V
- 山内清男 1969 「縄紋草創期の諸問題」MUSEUM第224号
- 佐藤達夫 1971 「縄紋式土器－縄紋草創期前半の縄年について－」日本文化の源流
- 西野元 1971 「三里塚－新東京国際空港用地内の考古学的調査」
- 天開山大谷寺 1972 「大谷寺洞窟遺跡」
- 酒井幸則他 1973 「昭和47年度長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－下伊那郡高森町地内（その2）」
- 鈴木道之助 1974 「下総台地における縄文時代初頭の文化」史館第4号
- 鈴木道之助 1974 「復跡遺跡－千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」
- 土井義夫他 1974 「秋川市二宮神社境内の遺跡」秋川市埋蔵文化財調査報告書第1集
- 高野博光 1976 「寺山」埼玉県遺跡発掘調査報告書第9集
- 塙静夫 1976 「大谷寺洞穴遺跡」栃木県史考古資料編1
- 小松虎 1967 「栃原岩陰遺跡の押型文土器」長野県考古学会誌27

- 鈴木道之助 1976 『雨古瀬遺跡一千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』
- 中山吉秀 1976 『高根北遺跡一千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』
- 鈴木道之助 1977 『東寺山石神遺跡の撫糸文系土器について』京葉Ⅱ東寺山石神遺跡
- 木島平村教育委員会 1977 『三枚原遺跡』
- 小松虎 1978 『柄原岩陰遺跡の押型文土器の出現時期』中部高地の考古学
- 宮下健司 1978 『矢柄研磨器の再検討—土器出現期の様相に関連して』信濃第30巻第4号
- 小林達雄・安岡路洋 1979 『縄文時代草創期における回転施文縄文への一様相—埼玉県大里郡岡部町水久保遺跡』埼玉県史研究第4号
- 網谷克彦他 1979 『鳥浜貝塚—縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査1-』
- 篠原正 1979 『北総台地における縄文時代草創期後半について』千葉県の歴史第17号
- 篠原正 1980 『笠木山遺跡発掘調査概報』
- 石田広美 1980 『苗見作遺跡の調査—君津広域水道用水供給事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 藤本弥城 1980 『那珂川下流の石器時代研究Ⅱ』
- 宮崎朝雄 1981 『撫糸文系土器群の終末と無文土器群』土曜考古第3号
- 宮重行・池田大助 1981 『木の楔』
- 高野博光 1981 『布佐余間戸遺跡』
- 広瀬昭弘 1981 『北信濃小佐原遺跡の表裏縄文土器について』信濃第33巻第4号
- 上野修一 1981 『栃木県藤岡町篠山貝塚発掘調査報告書』
- 友野良一 1982 『五向山遺跡』宮田寺史(上巻)
- 堀内真・宮下健司 1982 『富士山麓における表裏縄文土器—山梨・池ノ元遺跡採集の資料を中心として—』信濃第34巻第10号
- 服部実喜 1982 『向原遺跡—第1分冊ー』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告1
- 井口直司他 1982 『多聞寺前遺跡Ⅰ』
- 原川雄二他 1982 『No.205遺跡』多摩ニュータウン遺跡昭和56年度(第2分冊)
- 北総考古学研究会 1983 『山倉大山遺跡調査概報』北総考古学研究会学術調査報告
- 栃木県文化振興事業団 1983 『自治医科大学周辺地区昭和57年度埋蔵文化財発掘調査概報』
- 安孫子昭二 1983 『小山田No.13遺跡』小山田遺跡群Ⅱ
- 笠原信男 1984 『撫糸文系土器との対話』土曜考古第8号
- 谷口康浩 1984 『No.15遺跡—縄文時代の遺物ー』小山田遺跡群Ⅳ
- 西川博孝 1984 『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ-No.7遺跡』
- 村澤正弘他 1984 『一般国道246号(大和・厚木バイパス)地域内遺跡発掘調査報告』
- 長野原町教育委員会 1984 『石畳遺跡略報』
- 宮井英一 1985 『大林・Ⅱ・宮林・下南原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第50集
- 齊藤悟郎他 1985 『久原遺跡—旧石器・縄文時代編』川口市文化財調査報告書第23集
- 細田勝他 1985 『三番耕地・十八番耕地・十二番耕地・神山』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第51集

- 高橋誠 1985 「西の台第二次」船橋市遺跡調査会
- 富沢敏弘 1985 「中棚遺跡・長井坂城跡」
- 齊藤弘他 1985 「宇都宮清陵高校地内遺跡調査報告」栃木県埋蔵文化財調査報告第77集
- 漆畑稔・渋谷昌彦 1986 「仲道A遺跡」大仁町埋蔵文化財調査報告第9集
- 山形洋一他 1986 「西大宮バイパスNo.4遺跡—一般国道16号バイパス関係Ⅱ」大宮市遺跡調査会報告第16集
- 砂田佳弘 1986 「代官山遺跡」神奈川県埋蔵文化財調査報告
- 中西充 1986 「No.406遺跡—早期前半の土器—」多摩ニュータウン遺跡昭和59年度第2分冊
- 土肥孝 1986 「神奈川県大和市上草柳第三地点東遺跡出土の土器—関東地方における井草式以前の土器の様相」大和市史研究第12号
- 埼玉考古学会 1986 「埼玉考古学会30周年記念シンポジウム資料」埼玉考古第24号別冊
- 齊藤悟郎 1987 「臼原遺跡—考察編」川口市文化財調査報告書第25集
- 岡本東三 1987 「押型紋土器」季刊考古学第21号
- 谷口康浩 1987 「撚糸文系土器様式の成立に関する問題」史学研究集録12
- 戸田哲也 1988 「表裏縄文土器論」大和のあけぼのⅡ
- 埼玉考古学会 1988 「埼玉考古学会30周年記念シンポジウム—縄文草創期爪形文土器と多縄文土器をめぐる諸問題—記録集」埼玉考古第24号
- 金子直行 1988 「I 基調報告 押圧縄文土器と回転縄文土器」埼玉考古第24号
- 戸田哲也 1988 「IV コメント 表裏縄文土器についての所感」埼玉考古第24号
- 渋谷昌彦 1988 「IV コメント 多縄文土器の位置付けをめぐって」埼玉考古第24号
- 山田昌久 1988 「IV コメント 縄文時代草創期終末土器群の並行関係—多縄文系土器群の変遷と縄文時代草創期の終焉」埼玉考古第24号
- 岡本東三 1988 「IV コメント シンポジウム雑感」埼玉考古第24号
- 金子直行 1988 「V リコメント 草創期終末の土器群に関する覚書—表裏縄文土器を中心にして—」埼玉考古第24号
- 土肥孝 1988 「V リコメント 渋谷昌彦氏の疑問点について」埼玉考古第24号
- 巾隆之 1988 「石畳岩陰遺跡」群馬県史考古資料
- 栃木県文化振興事業団 1988 「5. 東野田遺跡」一般国道4号（新4号国道）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の経過
- 山田猛 1988 「押型文土器群の型式学的再検討—三重県下の前半期を中心として—」三重県史研究第4号
- 原田昌幸 1988 「花輪台式土器論」考古学雑誌第74巻第1号
- 中島宏 1988 「関東地方における押型文土器の様相」帝塚山考古学研究所シンポジウム資料
- 開野哲夫 1988 「静岡県下の押型紋段階の様相」帝塚山考古学研究所シンポジウム資料

研究紀要 第5号

1989

平成元年3月25日 印刷

平成元年3月31日 発行

発行 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒331 大宮市桜引町2-499 048-652-2231

印刷 新日本印刷株式会社